

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第131号

共同研究 日本海沿岸地域における弥生時代木製品にみる地域間交流 —桶形容器を中心に—	高野陽子・福山博章	1
共同研究 日本海沿岸出土の貿易陶磁器	綾部侑真・竹村亮仁・伊野近富	13
平成28年度発掘調査略報		19
1. 女布遺跡		
2. 丹波丸山古墳群		
3. 阿良須遺跡		
4. 東光寺跡		
5. 寺町旧域・法成寺跡		
6. 平安京跡(平安京左京一条三坊二町)		
7. 伏見城跡		
8. 長岡宮跡第514次・殿長遺跡		
9. 長岡京跡第1138次・井ノ内遺跡		
10. 芝山遺跡第15・16次(A地区)		
長岡京跡調査だより・127		29
現地公開状況(平成28年9月～平成29年1月)		31
普及啓発事業(平成28年9月～平成29年1月)		32
関西考古学の日関連事業「秋の考古学講座」		
韓国・武寧王陵から見た中国・南朝梁と日本の墓制	小池 寛	34
うろこ文様の起源を中央・東アジアの考古資料から探る	菅 博絵	36
センターの動向(平成28年9月～平成29年1月)		38

2017年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 日本海沿岸地域における 弥生時代木製品にみる地域間交流 －桶形容器を中心に－

高野陽子・福山博章

## 1. はじめに ーなぜ桶形容器かー

日本海沿岸域の弥生遺跡に特徴ある分布をみせる桶形容器と呼ばれる木製品がある。弥生時代中期に刳物容器は各地で見られるが、底板を別作りする桶形容器は、刳物と組物の2つの技術によってつくられた木製品であり、中期の類例は極めて少なく、後期に大きく展開する器種である。2003年の京都府久御山町市田斉当坊遺跡の調査において、全国的な弥生時代木組み井戸の構造を分析した際、大形桶形容器を製作する高度な木工技術が伝統的に日本海側にあり、井戸枠に桶を転用した井戸が北陸地域に特徴的なものであり、後期に日本海側の弥生遺跡に広く分布することを述べた。<sup>(注1)</sup> 列島内でも日本海沿岸部における偏在的な分布の在り方を示す桶形容器が、後期に盛行するその背景について、材料木としての針葉樹が得やすいという点に限らず、大陸との交渉を<sup>(注2)</sup> 考える視点を提示してきたところである。近年、北陸において約2万点以上の木製品が出土した石川県小松市八日市地方遺跡の報告や山陰において約1万点以上の木製品が出土した鳥取市青谷上寺地遺跡の報告が刊行されるにあたって、弥生時代の日本海沿岸地域が、特に高い木工技術を有する地域であることが再認識され、山陰と北陸における木製品の形式や木工技術に相互の交流がみられることが明らかとなっている。桶形容器についても、北陸・山陰の両地域でその類例が増加しており、丹後地域で出土している事例をあわせて、北陸・北近畿・山陰と日本海沿岸地域における地域的な系統の比較ができる状況にある。

本稿では、日本海側の弥生時代後期に盛行する底部別作りの桶形木製品について、丹後と周辺地域の類例をもとに、その形態と技術系統を検討し、木製容器からみた弥生時代の地域間交流の一端を明らかにしたい。

なお、本共同研究は、平成26年度・27年度共同研究事業の一環として、資料収集と検討を行ったものであり、執筆分担は、丹後の桶形容器の検証を福山が担当し(2節)、桶形容器の分類とその系統をめぐる問題を高野が執筆し(3～5節)、それぞれ文末に文責を記した。

(高野陽子)

## 2. 丹後地域の桶形容器

木製品は、単体では詳細な時期の位置づけが難しい場合が多いが、丹後地域では日置高畦遺跡、アバタ遺跡、正垣遺跡、古殿遺跡、浅後谷南遺跡で数多くの土器と共伴して木製品が出土してい

る。土器による編年的な位置づけが可能な資料群であり、日本海側の弥生時代から古墳時代の木製品を比較検討する上で、重要な資料となっている。

#### アバタ遺跡

アバタ遺跡は京丹後市大宮町に位置し、竹野川中流域に所在する集落遺跡である。限られた面積の調査ながら、幅約5m、深さ2.5mを測る弥生時代後期中葉の溝1条(SD01)が検出され、土器や木製品が良好な状態で出土した。土器は、弥生時代後期中葉の壺・甕・甕蓋・高杯・鉢・器台などが出土しており、当地の弥生土器編年の基準資料となっている。

土器と共伴して木製品が出土し、木包丁、桶形容器、棒状木製品、ナスビ形鋏先・エブリ等の農具、建築部材とみられる加工材などが出土している。

アバタ遺跡では桶形容器が5点出土している(第2図-1・2)。いずれも破損しており、全容は不明であるが、2種類の形態が存在する。

1は平面円形を呈する。内径は底部に向かって広くなり、外面形態は「ハ」字形を呈する。外面に蓋を装着する半円形の突起を持ち、外面底部に縦に切り込みを入れ装飾する。

2は平面楕円形を呈し、口縁部と底部の径は変化しない。外面には装飾を持たず、寸胴で直立した形態となる。外面に蓋を装着する突起を持っていたかは不明である。

いずれの桶形容器も原材を縦木取りし、心材部分を削り抜いて製作している。内外面ともに加工痕はほとんど認められず、丁寧に仕上げられている。内面底部には底板を接合するために突起を作り出している。突起下段には底板の装着痕跡と底板を木栓で固定するための穴が確認できる。穴は本体を貫通していないため、底部から底板をはめ込み、内面側から木栓で固定して製作したと考えられる。外面底部に装飾を施していることから、見栄えを意識した底板装着方法であると考えられる。

#### 正垣遺跡

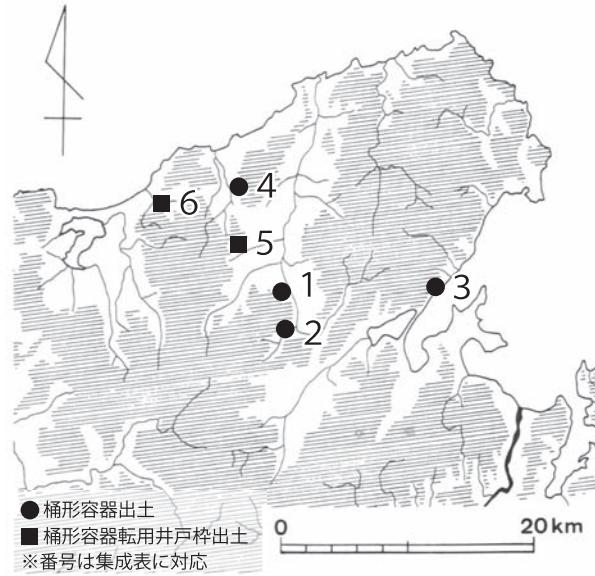
正垣遺跡は京丹後市大宮町に位置し、竹野川中流域の中郡平野南端丘陵裾部に所在する弥生時代後期の集落遺跡である。

弥生時代後期後葉の竪穴建物1棟と川跡2条が検出された。そのうちのSD05は幅約5m、深さ0.6mを測り、土器・木製品・ガラス小玉が出土している。土器は弥生時代後期後葉の壺・甕・蓋・高杯・器台などが出土している。木製品は琴・舟形木製品・木匙・建築材である木栓・桶形容器が出土している。

桶形容器は破損しており一部のみが残存する。原材を縦木取りし、心材部分を削り抜いて製作している。平面は楕円形を呈し、口縁部と底部の径は変化しない。外面には装飾を持たず、寸胴で直立した形態となる。外面に蓋を装着する突起を持っていたかは不明である。(第2図-3)

#### 古殿遺跡

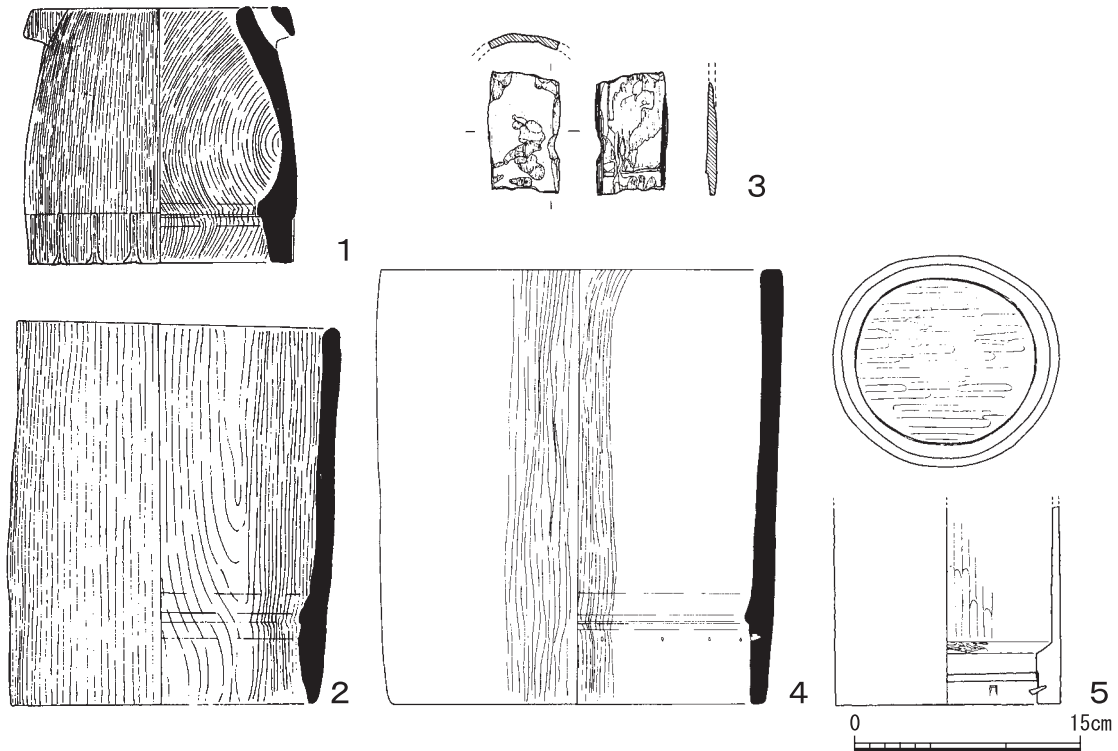
古殿遺跡は、京都府京丹後市峰山町に位置する古墳時代初頭の遺跡である。これまで、京都府教育委員会(1978年報告)や当センターによって3次にわたる調査が実施されており、溝や土坑等が検出されている。これらの遺構や包含層から、多量の土器や木製品が出土しており、弥生時代



第1図 桶形容器・桶形容器転用井戸分布図

表1 丹後地域における桶形容器出土遺跡一覧

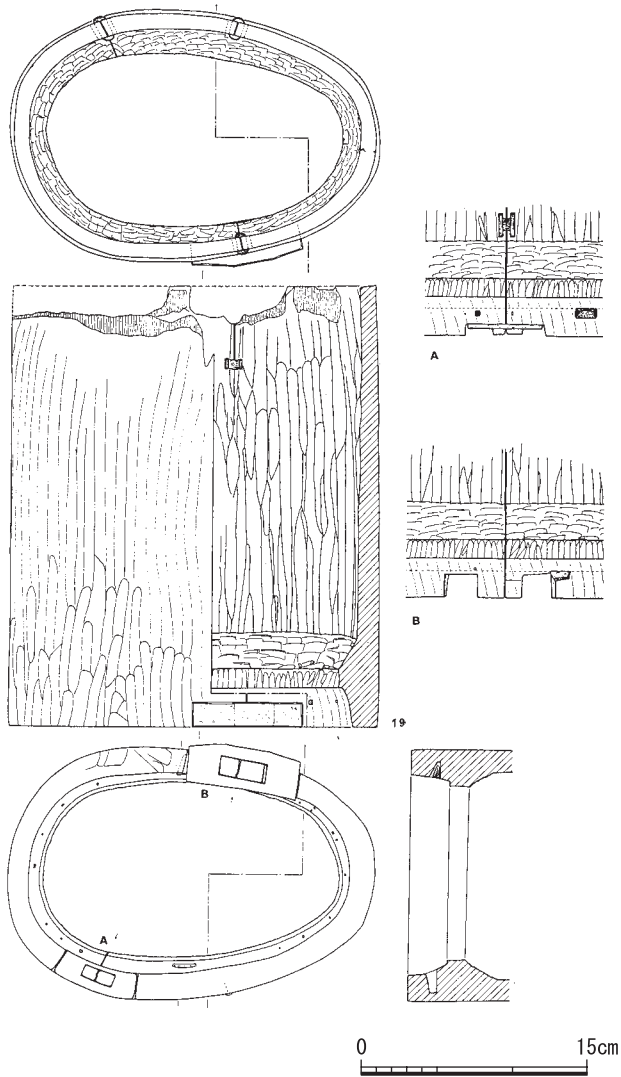
番号	所在地	遺跡名	出土遺構	個体数	木取り	樹種	時期	備考
1	京都府京丹後市	大宮町 アバタ	溝S D 01	5	縦	不明	弥生時代後期中葉	
2	京都府京丹後市	大宮町 正垣	溝S D 05	1	縦	不明	弥生時代後期後葉	
3	京都府宮津市	字日置 日置高畦	流路	1	縦	不明	弥生時代後期後葉	
4	京都府京丹後市	峰山町 古殿	井戸S E 05	1	縦	スギ	古墳時代初頭	井戸枠転用
5	京都府京丹後市	網野町 浅後谷南	溝S D 2016	1	縦	不明	古墳時代初頭	
6	京都府京丹後市	網野町 松ヶ崎	井戸S E 01	1	縦	不明	古墳時代初頭	井戸枠転用



第2図 丹後地域出土桶形容器実測図

(1・2：アバタ遺跡、3：正垣遺跡、4：日置高畦 遺跡、5：浅後谷南遺跡)





第3図 古殿遺跡出土桶形容器実測図

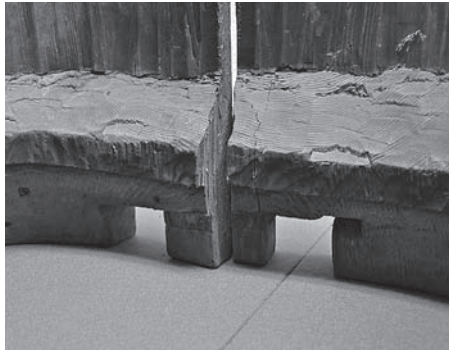


写真1 古殿遺跡出土桶形容器  
上：全体、中：柄部分、下：補修部分



写真2 松ヶ崎遺跡出土桶形容器(1：全体、2：内面突起と補修穴部分)

後期末から古墳時代前期の丹後地域の基準資料となっている。

井戸 S E03からは井戸枠に転用された桶形容器と井戸枠内より土器(壺)が出土しており、古墳時代前期初頭に当たる(第3図)。井戸 S E03出土の井戸枠転用桶形木製品は針葉樹材を縦木取りし、心材部分を削り抜いて製作している。内外面ともに手斧と鉋による加工痕が認められる。

内面底部には突起を作り出し、木栓を使用して底板を結合するための円形の穴と方形の穴が存在する。底板を底部からはめ込んだ後に棒状の木材を方形の穴に通して、底板を留めていたと考えられる。

このように大形の容器として製作、使用され、破損後に補修を行い井戸枠に転用したと考えられる。破損して二分割となった本体の補修には、本体底部の2か所に一对の柄を穿ち、別材で本体同士を結合する。その他、本体上部の4か所に一对の方形の穴を開け、桜の樹皮で本体同士を緊縛し、木栓をはめ込んで固定する。

井戸 S E03出土井戸枠転用桶形木製品の補修には柄を用いて部材を結合するという建築部材に用いられる技法と同様の技法が用いられている点や桜の樹皮と木栓を用いて結合する方法など、非常に高度な木工技術が用いられている。

#### 浅後谷南遺跡

浅後谷南遺跡は京丹後市網野町に位置し、福田川中流域の丘陵裾部に所在する弥生時代後期～古墳時代中期の集落遺跡であり、溝 S D05から槽と木樋を一本で製作した古墳時代前期前葉の導水施設が発見されたことで著名である。溝 S D2016から土器と共に桶形容器が1点出土している。

溝 S D2016は幅3m、深さ0.6mを測り、溝の断面形態は逆台形をなす。2度にわたり掘削されており、新・古の2時期が存在する。再掘削された新段階の溝では、堰状施設1箇所、護岸施設1箇所が検出された。溝 S D2016出土土器は古墳時代初頭の壺・甕・蓋・高杯・鉢・器台などが出土している。木製品は堰、護岸の部材である杭・板材、護岸材に転用された櫂・建築部材のほか、槽の破片と桶形容器が出土している。桶形容器は溝 S D2016において正位で出土した。一木材を削り貫いて製作する。平面楕円形を呈し、口縁部と底部の径は変化しない。外面には装飾と蓋を装着する突起を持たず、寸胴で直立した形態となる(第2図-5)。

外面の加工痕は劣化のため不明であるが、内面には鉋と考えられる加工痕が認められ、突起部分では、細かい加工痕が残る。

底板と底板を固定する木釘が残存している。底板は内面底部の突起部分にはめ込み、突起部分下段の5か所に木釘をはめ込み、底板を固定している。木釘穴は本体を貫通しない。

#### 松ヶ崎遺跡

松ヶ崎遺跡は京丹後市網野町に位置し、日本海沿岸に所在する遺跡である。遺跡の性格は不明であるが、古墳時代前期の包含層と井戸が検出されており、周辺に同時期の集落の存在が想定される。

井戸 S E01井戸枠に転用された桶形容器1点が出土している(写真2)。また、井戸掘形から少量の土器が出土している。土器は古墳時代初頭の甕・鉢が出土している。

桶形容器は底部から胴体部分が残存し、口縁部は欠損している。針葉樹材を縦木取りし、心材部分を削り抜いて製作している。平面楕円形を呈し、寸胴で直立した形態となる。外面に蓋を装着する突起を持っていたのかは不明である。内外面とも丁寧に仕上げられており、加工痕は認められないが、内面の突起部分には手斧の加工痕が見られる。内面底部には突起を作り出す。底板を結合するための方形の穴が3か所存在し、穴の上面と突起の間に底板の装着痕が残る。破損部分の1か所に一對の方形の穴を作り補修したと考えられる。

以上のように、丹後地域では6遺跡10点の桶形容器が出土している。共伴土器の検討から、丹後地域での出現時期は弥生時代後期中葉から古墳時代初頭であると位置づけられる。弥生時代後期中葉から古墳時代前期には小型の桶形容器が出土するが、古墳時代初頭に位置する古殿遺跡、松ヶ崎遺跡では大形の桶形容器が井戸枠に転用されていることが注目される。

(福山博章)

### 3. 桶形容器の特色

桶形容器については、弥生時代中期～古墳時代前期にかけての木製容器を集成し、分析を行った石川ゆずは氏の包括的な研究がある<sup>(注3)</sup>。石川氏は、弥生時代中期の刳物である合子などの小形容器から、弥生時代中期末から後期初頭の段階に底部を別作りした桶形容器(刳物桶とされる)に転換する要因として、成長の遅い広葉樹から成長の早い針葉樹へと木製容器の樹種が変化したことが背景にあるとする。広葉樹は固く緻密であることから底部も一本で作ることが可能だが、針葉樹は繊維方向に亀裂が生じるため、底部を一本で作ることがほぼ不可能であり、底板を別材ではめ込むことが必然であったとされる。弥生時代中期末に広葉樹の材料木が枯渇し、木製品の形式に変化を与えたとするもので注目される視点である。しかしながら、中期にみられる桶形容器という新たな形式の出現は、後述するように、前段階の刳物としての合子形容器から発展的に生成されるとみることが難しく、その系統と出現の背景については検討を要する。

以下、合子形容器から桶形容器への転換について、引き継がれる属性と新しい属性を視点に系統的に整理し、桶形容器を通じてみた広域における地域間交流の在り方を明らかにしたい。

#### a. 樹種と木取りの共通性

弥生時代中期から弥生時代後期へ展開する桶形容器の諸属性のうち、共通するのは、材料木のほとんどにスギなどの針葉樹が用いられていることである。この点は、日本海側の地域が針葉樹が得やすいという環境にあったことによると石川氏が指摘するところである。

桶形容器は底板を除いた桶身は刳物として作り出されるが、切り出した原材からどのように素材を取り出すか、その木取りによって、加工技術や原材の大きさ、ひいてはその量産の在り方にまで影響することになる。桶形木製品にみる原材からの木取りは、これまで出土している資料のほとんどが材料木に対して垂直に材を取り出す縦木取りである。幹径の大きな針葉樹材から素材を効率的に取り出し、量産に適した木取りをしていると言える。今回の資料調査の対象とした石川県小松市八日市地方遺跡は、弥生時代中期の大量の木製品が出土していることで知られるが、



特に未製品を含む容器類が数多く出土していることが注目される。刳物としての脚付きの合子形容器などは、伝統的にクワ材などの広葉樹が広く用いられるが、桶形容器は前述したようにスギを中心した針葉樹材を用い、基本的に縦木取りである。近畿地方南部などの木製容器の樹種選択や木取りと大きく異なり、量産に適したものと言えるだろう。こうした樹種選択と木取りは、弥生時代中期の桶形容器の出現から、古墳時代初頭の桶形容器の転用井戸枠におけるまで引き継がれ、容器類を交易の交換材として用いたと考えられる日本海沿岸地域の特質と言える。

#### b. 形態的特徴

桶形容器の形態にみる共通性は、桶身の内側底部の形状にある。弥生時代中期～古墳時代前期にかけての資料は、桶身の内面の処理には、底板の内側となる桶内面下部を内側に緩やかに、断面が鈍角をなすように削り出す特徴がみられる。直角に削り出しているものは、弥生時代中期中葉の出現当初の八日市地方遺跡の資料などにみられるが、ここでも鈍角をなすものと混在しており、出現当初からの手法が組物の手法として受け継がれている。底部に削り出しを設けることによって、底板は桶の直径よりも一回り小さなものとなるが、より径の小さな底板をはめ込むことで底板の抜け落ちを防ぎ、桶底の強度を増すことができるのであろう。底板の装着方法については、2節で示したアバタ遺跡出土例など木栓で底板を固定する例のほかに、桶形容器の底板の外側に棒状木製品が取り付けられたままの状態出土した青谷上寺地遺跡の例がある。その取り付け方法は、桶側面下部の外周に穴を穿ち、底板の裏側に棒状木製品を通し、底板の支えとする形態をとるものである。以上のように、底部内面内側に、傾斜をつけて削り出す技法は、弥生時代中期中葉の最古段階から古墳時代初頭の桶形容器に踏襲される特色であり、後世にみられる桶身を削って抉りを入れて底板を組み込む技法とは根本的に異なる。

#### 4. 桶形容器の分類と系統

前節で述べたように、日本海側の桶形木製品には、桶身となる器体の削り出しの技法、すなわち内面底部の処理に強い斉一性があり、系統的な分類を行うためには、属性の変異が大きい吊手あるいは把手の形状に注目する必要がある。吊手であるか、把手であるかは、機能にも少なからず影響を与え、合子形容器類からの転換と桶形容器の系統の問題を考えるうえで重要である。

桶形木製容器は、桶身を2形態に、吊手あるいは把手の形状を4形態に大きく分類でき、組み合わせ、以下のように分類できる。

##### <桶形木製容器の分類>

##### [吊手・把手の形状]

A類(吊手)－桶身の口縁上方に垂直に削り出し、吊手としての機能をもたせるもの

(i)円環状吊手 (ii)方形吊手 (iii)折衷型方形吊手

B類(把手)－桶身の側面に水平方向に突出して削り出し、蓋と身の結束孔としての機能をもたせた縦方向の穿孔がなされるもの

C類(小把手)－身の肩部に、把手状に低い突出部(小把手)を削り出したもの



D類(吊手・把手をもたない大形品、おもに井戸枠転用品)

[桶身の形状]

I類－桶身が筒状の形態をなすもの

II類－桶身が下膨れの形態をなすもの

※A類・C類はI類のみ

これまで出土している桶形容器は、弥生時代中期には6遺跡にとどまり、吊手・把手の形状が判明しているものでは、A類が5点、B類が1点である。弥生時代後期～古墳時代初頭は、40遺跡で100例を超え、把手形状の不明なものを除き、A類約35%、B類約39%、C類約6%、D類20%である。

弥生時代中期の桶形容器の出土例は極めて少なく、吊手A類が、北陸では八日市地方遺跡、山陰では青谷上寺地遺跡、タテチョウ遺跡、西川津遺跡で確認されるのみである。八日市地方遺跡の例は、吊手ないしは把手の形状は判別できないが、桶身は筒状をなすI類である。青谷上寺地遺跡では、2点の吊手A類が出土しているが、いずれも円環状の吊手A i類である。また、鳥根県タテチョウ遺跡、同西川津遺跡でも円環状の吊手A i類が出土しており、方形吊手A ii類は、西川津遺跡に1例をみるにすぎないことから、出現当初の吊手A類の形状は円形であり、後期に至って、方形の吊手が主体を占めるようになったと考えられる。後期に主流となる方形吊手は、単純な長方形の形状(A ii類)ではなく、長方形の吊手にバンドル状の突起が付くもの(A iii類)が主流であり、吊手として用いることも可能であるが、把手としての利便性を考慮した形態を呈しており、その意味で折衷型とみることができる。在地化する過程で、こうした形態が生み出されたのであろう。

桶形容器は、前述した石川氏の検討においても、弥生時代前期～中期の各地でみられる把手をもつ合子形容器を祖型として展開するとみられるようだが、出現当初の桶形容器は円環をもつA類吊手をもつ形態であり、在地器種の系統にない属性として評価されるべきである。円環吊手をもつ容器は、中国東北部周辺に分布する銅器や土器の形状にしばしばみるものであり、弥生時代中期における桶形容器の出現は、大陸との交流の視点で捉えなおす必要があると考える。<sup>(注4)</sup>

把手をもつB類は、その分布が集中する北陸での出土例はいずれも後期であるが、近年、刊行された鳥取市青谷上寺地遺跡の報告では、弥生時代中期の段階に位置づけられるとされる桶形容器が報告されており、その出現が中期に遡ると考えられる。把手部の形状は、弥生時代前、中期から系譜が追える脚付き合子形容器の系統にあると指摘されるところであり、桶形容器の出現以降に在来器種にみる把手形態の折衷型として生み出されたものと考えられる。<sup>(注5)</sup>

以上から、吊手状をなすA類、なかでも円環状をなすA i類桶形容器は、在来の土器や木製品の系統下に成立するとみることが困難な形態と機能をもち、円環状吊手は、把手B類と系統的に異なるものとして捉えられる。現状では、北陸における桶形容器の最古の形態は、北陸では小松市八日市地方遺跡の例になるが、残念ながら吊手部分は遺残していない。八日市地方遺跡の桶形容器は、下濱貴子氏による土器編年で八日市地方7～8期からみられるとされ、これは近畿地方



では凹線文出現以前の弥生時代中期中葉に相当する。報文で実測図が明らかにされたものはやや時期が下がり、八日市10期以降の堆積層から出土した桶形容器が提示されている。この桶形容器は後期に盛行する容器底部の内側に段をなすもので(第4図)、後期に盛行する桶形容器と同様な形態をなす。下濱編年に照らせば、おおよそ凹線文出現期以降のⅣ様式に併行するものである。<sup>(注6)</sup>

こうした点から、日本海側における桶形容器の最古の事例は、弥生時代中期前半の山陰の西川津遺跡・タテチョウ遺跡の例をあげることができる(第4図)。これまでから山陰では、半島系の無文土器や島根県沖の海底などで楽浪系の瓦質土器などが採集出土しており、人の移動を伴う交流があるとみられる地域である。弥生時代中期後半の青谷上寺地遺跡における2条突帯をもつ中国戦国時代のもので報告される搬入鉄斧をはじめ、多量の鉄製品を中心とした資料にみるように、山陰を中心に大陸との密接な交流が明らかになりつつある。すでに木製品においても、いわゆるジョッキ形木製品を例に中国東北部～朝鮮半島北部との関係性とその交渉が論議されているが、<sup>(注7)</sup>限られた威儀具でもある精製木製品に限らず、A iii類桶形容器にみるような雑器類にまでそうした交流がみられる可能性があり、同様の視点で検証してゆく必要がある。

## 5. 丹後の桶形容器と研究課題

桶形容器は、北陸を中心として、山陰、近畿北部などの日本海側の遺跡で出土しており、土器とともにその分布の拡がり注目される木製品である。従来、日本海側の木製品の交流では、透かし彫り精製花文高杯をはじめとして、北陸と山陰との関係性が注目され、丹後の資料が俎上にあげられることがなかったが、京丹後市の後期中葉のアバタ遺跡のB類桶形木製品や同じく京丹後市の古墳時代初頭の古殿遺跡の井戸枠D類など、山陰・北陸の木製品と形態だけでなく、木工技術に到るまで影響関係をみるべき事例があり、本稿でこうした木製品の再検討を行ったものである。

丹後では、弥生時代後期の集落調査が少なく、木製品の出土資料は極めて限られるため、全体的な傾向を捉えることが難しいが、そのなかで桶形容器の最も古い段階の資料に位置づけられるものは、2節で述べたアバタ遺跡出土の桶形容器である。形態はB II類、すなわち蓋との結束孔をもつ把手B類がつき、体部は円柱状に切り出した材料木から上部の把手を削り出すために過半が下膨れ状を呈するII類である。こうした形態をとるものは、鳥取市青谷上寺地遺跡や富山県惣領浦之前遺跡で出土し、山陰・北陸に通有にみられる形態である。青谷上寺地遺跡では中期段階から同様な把手の削り出し手法がみられるが、京丹後市奈具谷遺跡でも合子形の剝物容器に同様な手法があり、その影響関係が今後の課題となる。正垣遺跡出土例は、一部のみが残存していたもので把手形態は不明であるが、寸胴の体部をなすI類が出土し、後期後葉に帰属する。浅後谷南遺跡、古殿遺跡、松ヶ崎遺跡では、いずれも井戸枠などに転用されるD類が出土しているが、時期の判明している浅後谷南遺跡と古殿遺跡は浅後谷南式の庄内併行期新相～布留式初頭に帰属する。D類が蓄積している北陸では、石川県西念・南新保遺跡の法仏式古相とされる後期中葉後半の資料が初出であり、丹後に先行してその拡がりを認めることができる。2節で述べた補修時

の柄穴結合の手法などを含めて、北陸との交流下に出現したものと考えられよう。こうした状況は庄内式併行期における丹後への北陸系土器の搬入状況と一致するものであり、D類は井戸という生活遺構に関わる資料であるという点で、人の移動を含めた北陸との深い影響関係が伺える。一方、近畿地方南部では、大阪府久宝寺遺跡でB I類が出土しているが、B I類は北陸の西念・南新保遺跡や山陰の青谷上寺地遺跡、姫原西遺跡など日本海沿岸の各地で出土している。北近畿では、丹後を中核とする擬凹線文系土器様式の南限となる西丹波の兵庫県篠山市上板井遺跡で出土例があり、日本海沿岸部から北近畿を介して、加古川流域から近畿中枢地域に搬入されたものと考えられる。

弥生時代後期においては、土器の影響関係は時期によって大きく変動し、後期後葉には山陰・北陸の両地域の関係性が強まる傾向がある。一方で、木製品には細かな影響関係が見えにくい一面、確固とした形式、技法にみる共通性があり、木製品の交流は広く交易の視点で捉えなおす必要があることを示している。この共同研究を端緒として、今後、日本海沿岸地域やまた大陸を含めた交流と交易の実態を多角的に検証していきたい。

(高野陽子)

【謝辞】

小稿を執筆するにあたり、下濱貴子 楠 正勝 君嶋俊行 森嶋康雄 長谷川達氏にご教示をいただき、各所蔵機関の資料を実見させていただいた。記して、謝意を表したい。

本稿は、平成26年・27年に実施した共同研究

「日本海周辺地域における弥生時代後期～古墳時代初頭の地域間交流－出土土器・木製品の再評価－」において、実見・収集した資料をもとに執筆した。

共同研究員は以下のとおりである。

代表 高野陽子(調査課調査第1係主査)

福山博章(調査課調査第2係調査員)

山崎美輪(元当調査研究センター調査課第3係調査員、現京田辺市教育委員会)

(たかの・ようこ＝当調査研究センター調査課調査第1係主査)

(ふくやま・ひろあき＝当調査研究センター調査課調査第2係調査員)

注1 高野陽子「井戸」(『京都府遺跡調査報告書第36冊 市田齊当 坊遺跡』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

注2 高野陽子「旦波の土器と地域間交流」(『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬』二上山博物館編 学生社) 2011 同シンポジウム記録「四 初期古墳」

注3 石川ゆずは「弥生時代中期～古墳時代前期にかけての木製容器」(『富山考古学研究 起要第8号』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所) 2005



- 注4 参考資料ではあるが、兵庫県篠山市上板井遺跡では、A iii類とB類の桶形容器に加え、双耳の半環状吊手をもつ土器が出土している。この土器については半島系の土器とする視点もあり注目されるところであるが、弥生中期から後期の流路から出土しているため、時期は不明である。
- 注5 前掲注3参照。
- 注6 下濱貴子「報告3 石川県における弥生時代の拠点集落について」(『まいぶん講座フォーラム報告 2 弥生時代の北陸を掘る－考証 八日市地方遺跡とは－』小松市教育委員会) 2009
- 注7 設楽博己「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集国立歴史民族博物館) 2009

#### 参考文献

- 小松市教育委員会『シンポジウム 科学分析でここまでわかった八日市地方遺跡 小松式土器の時代－樹木からのアプローチ－』2014年
- 石川ゆずは「惣領浦之前遺跡出土の木製品について」(『富山考古学研究紀要第7号』2004 君嶋俊行編『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 8 木製農工具・漁撈具』鳥取県埋蔵文化財センター) 2012
- 京都府教育委員会「古殿遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1978
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「府営圃場整備関係遺跡昭和60・61年度(1)正垣遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊) 1987
- 京都府教育委員会「アバタ遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』1990
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「松ヶ崎遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第82冊) 1998
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「浅後谷南遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第93冊) 2000
- 兵庫県教育委員会『上板井遺跡発掘調査報告書』1990
- 財団法人大阪文化財センター『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅳ』2004
- 湖西線関係遺跡調査団『湖西線関係遺跡調査報告書』1973
- 島根県教育委員会『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1990
- 島根県教育委員会『姫原西遺跡』1999
- 出雲市教育委員会『海上遺跡』2002
- 島根県土木部・島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 2』1983
- 島根県教育委員会『西川津遺跡4』1999
- 島根県土木部・島根県教育委員会『西川津遺跡Ⅳ』2003
- 財団法人鳥取県教育文化財団『青谷上寺地遺跡3』2001
- 財団法人鳥取県教育文化財団『青谷上寺地遺跡4』2002
- 石川県小松市教育委員会『八日市地方遺跡Ⅰ 第2冊 遺物報告編』2003
- 石川県小松市教育委員会『八日市地方遺跡Ⅱ 第3部製玉編 第4部木器編』2014
- 金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡』1983
- 金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』1989
- 金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ』1992
- 金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』1996
- 石川県立埋蔵文化財センター『猫橋遺跡』1998

# 日本海沿岸出土の貿易陶磁器

綾部侑真・竹村亮仁・伊野近富

## 1. はじめに

今回報告する共同研究「日本海沿岸出土の貿易陶磁器」は、2か年計画で、日本海沿岸における中国製、朝鮮半島製を中心とする輸入陶磁器の様相について検討したものである。

初年度は、新潟県奥山荘城館遺跡、下町・坊城遺跡、2年目は福井県白山平泉寺旧境内、石川県寺家遺跡、浄水寺跡、永光寺跡の資料を実見した。

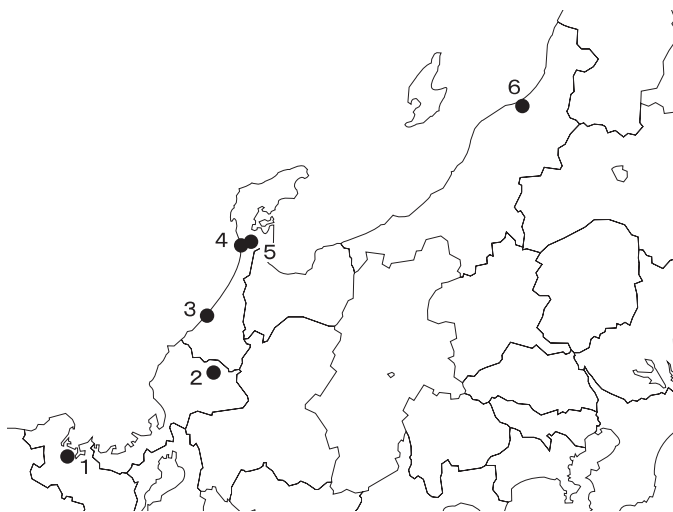


図 遺跡位置図

- |         |          |            |
|---------|----------|------------|
| 1. 大川遺跡 | 2. 白山平泉寺 | 3. 浄水寺跡    |
| 4. 寺家遺跡 | 5. 永光寺跡  | 6. 奥山荘城館遺跡 |

## 2. 各地の様相

平成24年度から平成26年度にかけて実施した京都府舞鶴市大川遺跡の発掘調査では、多数の輸入陶磁器が出土した。その出土量の多さは、今後日本海沿岸の物の移動を考える上で大きな資料と評価できる。今回実見を行った各遺跡と地域の様相を中世前半期に主眼をおいて概観するとともに、出土傾向と流通経路について検討する。

### 1) 丹後

大川遺跡は、京都府舞鶴市に所在し、由良川河口から約9km遡った左岸に位置する弥生時代から室町時代にかけての集落遺跡である。遺跡の西側には、延喜式内社である大川神社が鎮座する。由良川は丹波山地に源を発し、綾部市、福知山市を流れ、若狭湾に注ぐ京都府北部最大の河川である。由良川を遡ると福知山市で支流である竹田川と合流し、兵庫県丹波市で、標高95mの分水界で加古川水系へと繋がる。このいわゆる由良川・加古川ルートは、弥生時代以降の交易のルートとして重要なものと認識されている。大川遺跡はこのルート上にある。平成24年から平成27年にかけて実施した調査で、平安時代後期から室町時代にかけての、集落の一部を確認した。鍛冶工房跡や、掘立柱建物群を確認している。銭貨が173枚出土したことなどから、商業活動が盛んな集落であったと考えている。中世は12世紀～15世紀末の遺物が出土している。中世の遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、国産陶器、輸入陶磁器で構成される。

陶器は、常滑焼、丹波焼、越前焼、古瀬戸がある。常滑焼、越前焼がそのほとんどを占める。輸入陶磁器は1,063点出土しており、京都北部では宮津市中野遺跡、福知山市大内城跡と並ぶ出土点数である。京都府内出土の輸入陶磁器に関しては、伊野近富によって出土傾向を把握する試みが行われている(伊野2015)。丹後地域に限ってみると、輸入陶磁器の報告点数は1,069点である。これは、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査を行った遺跡(1982～2007年)の報告遺物の集成であるので遺構の性格、遺物量に偏りがあることに注意しなければならない。これには大川遺跡出土の遺物は含まれておらず、丹後地域の全体と比較しても大川遺跡の輸入陶磁器の出土量が多いことが窺える。輸入陶磁器は、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁、青白磁、朝鮮半島製陶磁器で構成される。青磁は龍泉窯青磁Ⅰ類(劃花文)、鎬蓮弁文碗、無文碗が多い。その他、龍泉窯系皿、杯・盤が出土している。同安窯青磁は、碗、皿がある。白磁は、碗Ⅳ類・Ⅴ類、皿が主体であり、碗Ⅱ類、壺は少ない。青白磁は、合子、小壺があるが、合計28点と少数である。朝鮮半島製陶磁器は、象嵌青磁梅瓶、鉢など21点出土した。輸入陶磁器には奢侈品が少なく、一般的な集落遺跡と同様である。そのほかの土器は、在地製品がほとんどである。土師器皿は、回転台土師器皿が主体でてづくね成形の京都模倣の製品は少ない。瓦器碗は一定量出土しており、丹波地域との関係が認められるものの、基本的には在地に基盤を置く遺跡といえる。

表1 大川遺跡器種別破片点数

種類	土師器	須恵器	黒色土器	瓦器	陶器	小計	輸入陶磁器	合計	銭貨
出土点数	57,459	909	1,585	875	289	61,117	1,063	62,180	173

表2 大川遺跡輸入陶磁器器種別破片点数

種類	白磁						青白磁		青磁												合計			
	碗Ⅱ	碗Ⅳ	碗Ⅴ	その他碗	皿	小壺	壺	小壺	合子	龍泉窯碗Ⅰ	龍泉窯鎬蓮弁文碗	龍泉窯蓮弁文碗	龍泉窯幅広蓮弁文碗	龍泉窯細蓮弁文碗	龍泉窯無文碗	龍泉窯皿	龍泉窯杯・盤	龍泉窯香炉	同安窯碗	同安窯皿		生産地不明	褐釉・緑釉・その他	高麗・朝鮮
出土点数	13	68	80	219	176	4	13	13	15	56	73	13	10	13	163	45	32	0	22	3	0	11	21	1,063

## 2)能登

羽咋市永光寺跡・寺家遺跡の遺物を実見した。永光寺は正和元(1312)年に開山された寺院で、曹洞宗の発展史にとって重要な地位を占める古刹である。これらの経営基盤を支えていたのは地元の地頭領主層であるが、ときの政治勢力と深くかかわり、後醍醐天皇や足利尊氏の庇護を受けるなどして能登国の中心寺院の権威を高めていった。応仁・天正の2度の戦火により焼失し、その後前田利家によって再興された。

見学した遺物は15世紀の高台挟り入り白磁皿や龍泉窯細蓮弁文青磁碗・龍泉窯青磁盤などのほか、青花磁器(染付)である。14～16世紀のものであり、文献にみえる寺の歴史と符合している。このほか、珠洲焼鉢・甕と越前焼鉢・甕がある。14世紀が珠洲焼から越前焼に移行していく時期

である。

史跡寺家遺跡は、渤海と深い関わりを持っていた、能登一宮である気多神社に関連する祭祀遺構と集落跡である。10世紀と15世紀に砂丘の進入があり、遺跡はそれぞれ途絶している。古代後期では越州窯青磁壺や長沙窯褐釉壺など初期貿易陶磁器が3点出土している。中世前半の貿易陶磁器は白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、青白磁で構成される。白磁は椀・皿が多数を占め、合子を少量含む。椀は白磁椀Ⅳ類が多く、Ⅴ類が少しある。青磁は龍泉窯系青磁椀、特に鎬蓮弁文が中心で、同安窯系椀・皿は少ない。その他青磁壺が出土している。青白磁には壺、香炉が出土している。12世紀から13世紀が中心である。

西川島遺跡群(桜町遺跡、大町・縄手遺跡、御館遺跡、白山橋遺跡、美麻奈比古神社前遺跡)では在地領主の居館が見ついている。12世紀から13世紀の白磁は、椀や皿のほか、壺、合子がある。青磁は龍泉窯系蓮弁文椀を中心とした椀類、同安窯系青磁皿がある。その他、青白磁梅瓶合子が出土している。

### 3)加賀

浄水寺跡は山林寺院で、12世紀初頭の礎石建物(仏堂)が見ついている。仏堂焼失後、14世紀に再建されている。9世紀から10世紀の長沙窯水注・椀、越州窯椀・皿を实見した。長沙窯椀は白色の化粧土が表面に残っているものの、釉薬はほとんどかかっている。もう1例は椀ではなく、水注と思われるもので、全面施釉である。胎土は緻密である。釉の色は濃緑色で、近江系の緑釉陶器に似ているが、釉薬は透明度が高く、素地が透けて見える。内面底部にロクロ痕跡がある。越州窯のものは能登の寺家遺跡などでも出土しているが、石川県全体でみると加賀での出土が多いようである。

### 4)越前

史跡白山平泉寺旧境内は、白山の越前川登り口に開かれた山岳寺院である。古代から中世にかけては、白山信仰を背景に、北陸でも有数の宗教勢力を誇り、伝承では、最盛期である戦国期には48社、36堂、6千坊が境内に立ち並び、僧兵は8千を数えたという。しかし、天正2(1574)年に向一揆の攻撃を受けて全山全焼した。その後、天正11(1583)年に中心部は再興されたものの、坊院などの周辺部は再興されなかったようである。江戸時代には朱印地200石を有するなど、周辺地域への影響力を持ち続けた。

坊院跡から出土した遺物のうち、南谷調査地のものを中心に実見した。土師器、瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器などで構成される。瓦質土器は風炉、火鉢などが出土している。国産陶器は越前焼・珠洲焼・常滑焼・白瓷・加賀焼・信楽焼がある。割合では、越前焼が圧倒的に多い。大川遺跡では、越前焼・常滑焼は出土するものの、信楽焼は出土しておらず、平泉寺には京都方面から内陸を通り物が入ってきたことを示している。輸入陶磁器には、白磁、青磁、青花磁器、青白磁、黒釉陶器などがあり、15世紀から16世紀段階のものが中心である。平成13年度から平成18年度にかけての発掘調査では、あわせて5,502点の輸入陶磁器が出土している。白磁は2,096点出土しており、その中でも皿類が圧倒的に多く1,348点出土しており、12世紀中頃から13世紀のも



のが多い。その他、椀・杯・壺類・角杯などがある。青磁は2,298点出土しており、龍泉窯系青磁椀・皿・杯、同安窯系青磁椀・皿、盤、香炉、壺類、角形花生がある。特殊なものとしては青磁人物像燭台が出土している。青白磁は92点で、輸入陶磁器全体の1%にもみないが、大川遺跡と比較すると、椀・皿・水注・合子・梅瓶・小壺の蓋のように、器種が豊富である。青白磁仏像(観音像)は日本での出土例は僅かである。福岡県博多遺跡のほか、京都府内では京都大学構内遺跡で出土している。その他、中国磁州窯系陶器(翡翠釉陶器)や青花、16世紀後半の朝鮮半島製陶器鉢類が出土している。青花は明代のものが大半であるが、元代の青花も少数ながら含まれる。

### 5) 越後

奥山荘は、往時摂関家領である。建仁元(1201)年に越後平氏城家の滅亡に伴って、鎌倉御家人三浦和田(高井)氏が地頭として入国し、在地支配を展開した。その後、荘域は建治3(1277)年に、北条(黒川)・中条(中条：惣領家)・南条(関沢家)に3分される。江上館は惣領家中条氏の館跡と考えられている。1町四方の主郭の南北に馬出と虎口が構えられている。下町・坊城遺跡は江上館に接する奥山荘の遺跡で、江上館、下町・坊城遺跡は奥山荘の「政所条」と考えられている。江上館跡出土の輸入陶磁器は中国製青磁、白磁、青白磁、鉄釉、青花、朝鮮半島系陶器などがある。15世紀から16世紀のものが中心である。青磁はほとんどが龍泉窯系青磁で、端反椀が主体を占める。その他、盤、壺、角杯、稜花皿、器台など多様な器種が出土している。稜花皿は青みがかかった明るいものである。白磁は、皿が大半を占める。その多くが端反皿である。色調は白色であるが、素地が粗く、外面がでこぼこしており、釉薬も薄く、釉薬がかかっていない個所もある。また、やや黄色がかかったものも多い。ごく少数ではあるが、13世紀後半から14世紀前半の口禿皿も含まれる。そのうち1点は内側に油煤が付着しており、灯火器として使われたようである。平安京の資料でも灯火器として使用された痕跡のあるものがしばしば認められる。青白磁は皿、合子、梅瓶などがある。景德鎮窯の器壁が薄く、釉色が綺麗なものではなく、ややくすんだもので、景德鎮窯系と考えられる。朝鮮半島製のものは朝鮮王朝期の象嵌瓶、雑釉皿がある。さらに、中国製天目椀も多く出土している。また、土師器皿には京都模倣とみられる手づくね成形のものが含まれる。

下町・坊城遺跡の輸入陶磁器は中国製青磁、白磁、青花、鉄釉陶器などの他、朝鮮半島製雑釉陶器がある。青磁は、龍泉窯系のものが大半を占め、越州窯系、同安窯系のものが少数含まれる。龍泉窯系青磁は、椀、皿、小杯、瓶、盤、香炉などで構成される。器形は江上館の方が多様性に富むようである。15世紀代のものが大半である江上館と比べ、13世紀段階のものが多くなる。白磁は椀、皿、小杯、角杯、瓶類で構成される。12世紀から13世紀代のものには白磁椀Ⅱ類・Ⅳ類が多く、Ⅵ～Ⅸ類も含まれる。13世紀後半になると口禿皿が主となるようである。14世紀代に入ると、腰部が張り口縁が外反するビロースクタイプの椀がみられる。青白磁は皿、合子、水注、器台が出土している。朝鮮製雑釉陶器は皿が主体で平高台と有台のものがある。

## 3. 出土傾向からみた流通経路

表4は、11世紀後半から14世紀初頭における平泉寺跡、下町・条坊遺跡出土の輸入陶磁器をま

とめたものである。下町・坊城跡はC地点調査報告書掲載分を、平泉跡は阿部来が行った集成を元に再作成を試みたものである(阿部2015)。11世紀後半から12世紀後半は白磁の出土が多く、12世紀後半からは青磁が主体となる京都府内における輸入陶磁器の出土傾向と変わらない。12世紀後半でも白磁皿Ⅸ類(口禿)が24点出土している。青磁は12世紀後半から13世紀中頃は、椀が中心で鎬蓮弁の量が多い。後半になると端反の杯Ⅲが一定の割合をしめるようになる。同安窯系青磁は龍泉窯系青磁が550点に対して、25点と少数である。福井県での同安窯系青磁の出土例は、平泉寺周辺や九頭竜川流域に多く、福井平野や若狭では少ないようである。白磁椀は椀Ⅴ類が13点と最も多い。越前若狭全体でみると椀Ⅳ類の報告例が多いようである。また、北陸全体をみても青磁・白磁・青白磁を問わず壺・瓶類の出土が多く、寺院であり、また大きな権力を持っていた平泉寺の性格を表しているといえる。

白磁の流通経路を分析した研究(水澤2011)によれば、11世紀後半から12世紀には博多から日本海沿岸ルートが想定できるとした。さらに、越中・越後で15世紀にも大量の輸入陶磁器が出土することから、このルートは室町時代まで存続したという。ここで、12世紀後半に出土する龍泉窯系劃花椀(椀Ⅰ類)、同安窯青磁椀・皿の出土数をみてみたいと思う。大川遺跡は龍泉窯系劃花椀が56点、同安窯系青磁が25点で、比率は2.2:1(小数第2位切り捨て)である。平泉寺、下町・条坊遺跡C地区を見てみると、それぞれ2.0:1、1.8:1となる。ほぼ同様の比率である。これに対して、山城は1.4:1で相対的に同安窯が多い。12世紀後半頃の北陸地域では、日本海沿岸ルートをメインとして輸入陶磁器が運ばれていたことを示唆するとみられる。

#### 4. まとめ

今回、11世紀後半から14世紀を中心に北陸の拠点的な遺跡の輸入陶磁器を実見した。実見した遺跡の最盛期にやばらつきがあるものの、11世紀後半から白磁椀Ⅳ類を中心として輸入陶磁器の出土量が増加し、13世紀には白磁に代わる形で青磁鎬蓮弁文椀が増加する傾向は、京都府内と同じである。青白磁は、各地域で一定数出土している。青磁・白磁と比べて出土量が10%未満であり、京都府内と変わらない。しかし、今回実見することがかなわなかったが富山県円念寺山遺跡(経塚群)のように、遺跡の性格によっては青白磁が青磁・白磁の出土量を上回る例もあるようである。器形別にみても、拠点的な場所では青磁・白磁ともに、壺・瓶・水注・角杯・香炉

表3 京都府内全体・旧国別出土状況(伊野2015)

白磁										青白磁		青磁																	鉄釉	雑釉	青磁他	青花			
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	龍泉窯系														同安窯								
椀Ⅱ	椀Ⅳ	椀Ⅴ	その他椀	皿	口はげ皿	端反皿	高台折り皿	合子	壺	小壺	合子	椀・杯・皿	越磁	椀Ⅰ	鎬蓮弁文椀	蓮弁文椀	幅広蓮弁文椀	細蓮弁文椀	雷文帯椀	見込み印花文	無文椀	椀Ⅲ	稜花皿	壺	杯・盤	香炉	同安窯椀	同安窯皿	生産地不明	天目茶碗	襦袢・緑釉・その他	高麗・朝鮮	椀	皿	
29	228	64	85	49	13	30	3	6	8	10	14	13	13	40	60	23	8	20	9	17	111	26	17	6	17	3	13	16	2	2	20	4	52	38	全体
12	31	10	14	6	0	16	0	2	1	1	2	4	2	12	9	3	4	4	1	2	20	3	8	0	6	1	1	0	0	1	2	0	18	15	丹後
4	67	30	34	23	2	12	0	1	0	4	5	5	0	11	24	7	2	11	4	6	42	12	3	1	8	1	7	9	0	1	3	0	22	13	丹波
13	130	24	37	20	11	2	3	3	7	5	7	4	11	17	27	13	2	5	4	9	49	11	6	5	3	1	5	7	2	0	15	4	12	10	山城

表4 平泉寺、下町・坊城遺跡C地区出土輸入陶磁器点数

種類	白磁						青白磁						青磁												小計						
	碗Ⅱ	碗Ⅳ	碗Ⅴ	その他碗	皿	小壺	壺・瓶	碗	皿	合子	水注	梅瓶	壺	筒型不明品	仏像	青磁碗Ⅰ	鎚蓮弁文碗Ⅱ	蓮文文碗Ⅲ	幅広蓮弁文碗	細蓮弁文碗	無文碗	皿	杯	盤		壺	香炉	同安窯碗	同安窯皿	褐釉・緑釉・その他	高麗・朝鮮
平泉寺	3	8	13	48	34		103	2			6	72	3	4	5	52	127	9				26	41		252	45	21	4			878
下町・坊城	7	12		17	15		5		8	6	2	1		1		28	27	2					4	4				9	6	154	

のようないわゆる食膳具以外の奢侈品の出土が多くなる。特に大きな影響力を持っていた寺院である平泉寺ではその傾向が顕著である。

その他、14世紀以降の製品であるが、朝鮮半島製の陶磁器は平泉寺・奥山荘遺跡で確認した。奥山荘政所条遺跡群では、朝鮮象嵌青磁が出土している他、下町・坊城遺跡C地点では雑釉陶器皿が15点報告されている。平泉寺では、16世紀後半とみられる雑器が出土している。雑釉陶器皿は、日本海沿岸の城跡で出土が認められ中国・朝鮮半島から発した日本海沿岸ルートの物流の裏付けとなるものである。

今回、輸入陶磁器のみを扱ったが、各遺跡の遺構の実年代による検討は行えていない。今後の課題として、その他の出土遺物との対応関係を検討する必要がある。

- (あやべ・ゆうま = 当調査研究センター調査課調査第2係調査員)
- (たけむら・かつひと = 当調査研究センター調査課調査第3係調査員)
- (いの・ちかとも = 元当調査研究センター調査課調査第3係副主査)

参考文献

阿部 来「中世前半における越前若狭の輸入陶磁器」(『平成27年 環日本海文化交流史調査研究集会「中世前半における輸入陶磁器とその流通」』公益財団法人石川県埋蔵文化財調査研究センター編)2015

伊野近富(「京都府出土輸入陶磁器の特徴」『亀井明德氏追悼・貿易陶器研究等論文集』亀井明德さん追悼文集刊行会)2016

伊野近富「京都府出土の輸入陶磁器」(『京都府埋蔵文化財情報』第128号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2015

水澤幸一「北東日本海沿岸地域の物流」(『石川の歴史遺産セミナー講演録第9～11回「能登」』石川県立歴史博物館)2011

松村英之「白山平泉寺旧境内の貿易陶磁－青白磁仏像を中心に－」(『貿易陶磁研究』第33号 日本貿易陶磁研究会)2013

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2016『京都府遺跡調査報告集第164冊』

勝山市教育委員会「史跡 白山平泉寺旧境内発掘調査報告集－南谷坊院跡内容確認発掘調査・発掘調査等事業－」『勝山市埋蔵文化財調査報告書第16集』2008

中条町教育委員会「下町・坊城遺跡V～C地点遺構編・総論編～」『中条町埋蔵文化財調査報告集第21集』2001

中条町教育委員会「下町・坊城遺跡V(C地点調査・写真図版編)」『中条町埋蔵文化財調査報告集第21集』2001

# 1. 女布遺跡<sup>によ</sup>

所在地 京丹後市久美浜町女布

調査期間 平成28年8月2日～9月22日

調査面積 430㎡

はじめに 女布遺跡は、佐濃谷川中流域の扇状地に位置する。弥生時代から近世にかけての集落跡とされており、弥生土器片などが採集されている。周辺は、佐濃谷川流域でも遺跡が密に分布する地域である。この遺跡は、中心的な集落と考えられているが、具体的な様相は不明である。

今回の発掘調査は、府営農業農村整備事業に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。農業用水路が拡張される部分のみの狭小な場所の調査である。

調査概要 今回の調査では、調査対象地内に、14か所のトレンチを設定した。このうち、明確な遺構を検出したのは、扇状地の上部に設定したトレンチ4か所である。弥生時代後期の竪穴建物・弥生時代～中世のピット・中世墓とみられる土坑・時期不明の溝等を検出した。その他のトレンチでは沼状堆積とみられるシルト層や粘質土層、佐濃谷川の氾濫原であったことを示す礫層などを確認したのみで、顕著な遺構は検出しなかった。

竪穴建物は2基検出したが、調査範囲が限られており、全容の検出には至らなかった。従って規模などの詳細は不明である。平面形も明確ではないが、外形がやや弧状であり、円形の可能性がある。弥生時代後期の遺物が出土しており、その時期の遺構とみられる。このうちの1基からは、床面を2面確認し、周壁溝も外側に掘り直した痕跡があり、建て替えが行われたものとみら



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 久美浜)

れる。床面には、周壁溝から建物中央に向って延びる溝をもつ。

土坑は、長さ1.5m、幅0.6mを測る長楕円形状で、中国製青磁椀片などが出土した。形状や出土遺物から、中世の墓の可能性が考えられる。

まとめ 女布遺跡では、これまで範囲確認調査などが行われているが、具体的な遺跡の様相は不明であった。今回の調査では、弥生時代後期の竪穴建物や弥生時代～中世のピット、中世墓と考えられる土坑などを検出した。これまで明確でなかった遺跡の様相の一端を明らかにしたと言える。(引原茂治)



## たんばまるやま 2. 丹波丸山古墳群

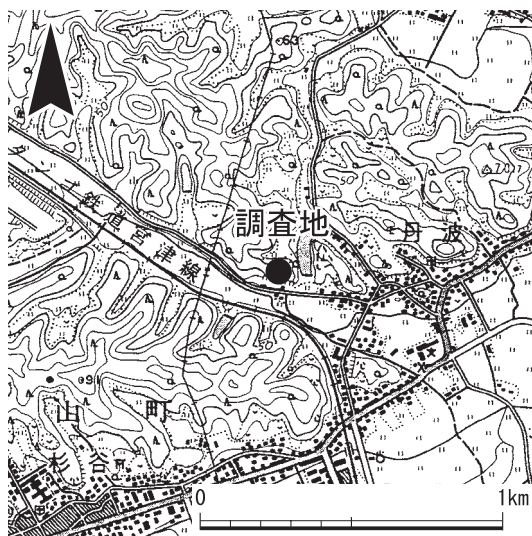
所在地 京丹後市峰山町丹波

調査期間 平成28年6月3日～12月14日

調査面積 2,000㎡

はじめに 丹波丸山古墳群は、丹後半島の中央、中郡盆地の北部に形成される丘陵上に立地する。周辺には、丹後最大規模の弥生墳丘墓の史跡赤坂今井墳墓や、古墳時代前期と推定される全長100mの前方後円墳である府指定史跡湧田山1号墳など、弥生墳丘墓や古墳が多く分布する丹後の中核的な地域である。今回の調査は、京都府丹後土木事務所による平成28年度掛津峰山線防災・安全交付金事業に係る工事に伴うものである。

調査概要 丹波丸山古墳群は、総数34基の古墳群である。今回の調査では、古墳群の中心的な墳墓である32号墳と、33号墳・34号墳、を含む7基の古墳の調査を実施した。32号墳は、墳丘規模28mの楕円形状を呈する古墳である。埋葬施設は、墳頂部で5基を検出した。中心に位置する第1埋葬施設は、東西方向の主軸をもち、墓壙規模長辺6.1m、短辺3.5mを呈する。舟形木棺を内部主体とし、棺内から鉄製鉈1本が出土した。第1埋葬施設と並行して、南側で検出した第2埋葬施設は、墓壙規模長辺3.1m、短辺2.1m、その東側で検出した第3埋葬施設は長辺3.0m、短辺1.6mを測り、いずれも内部主体は組み合わせ木棺と推定される。第1埋葬施設と直交して東側で検出した第4埋葬施設は、墓壙規模長辺3.9m、短辺1.9mを測り、舟形木棺を内部主体とする。さらに、墳丘北側で長辺1.4m、短辺1.0mの小規模な第5埋葬施設を検出した。墳丘裾部は一部テラスを作り出し、土師器が出土した。出土土器から、32号墳の築造時期は古墳時代前期前半と推定される。33号墳、34号墳は、階段状に削り出した墳墓で、34号は舟形木棺を内部主体とする。



調査地位置図  
(国土地理院 1/25,000 峰山町)

また、その他の4古墳は、いずれも埋葬施設が削平ないしは流失し、時期は不明である。丘陵の傾斜面からは、不整形土坑や、焼土面を検出した。周辺から、奈良時代～平安時代の土器が出土し、歴史時代にも丘陵裾部の一部が生産活動などに活用されたと推定される。

まとめ 今回の調査では、古墳群で最も規模の大きな32号墳の第1埋葬施設をはじめ、3基の舟形木棺を検出した。同一古墳群のなかで、複数の舟形木棺を検出する例は少なく、被葬者集団の性格を反映するものとして、今後検討していく必要がある。(高野陽子)

### 3. 阿良須遺跡

所在地 福知山市大江町北有路小字大坪ほか

調査期間 平成28年 5月25日～12月26日

調査面積 1,500㎡

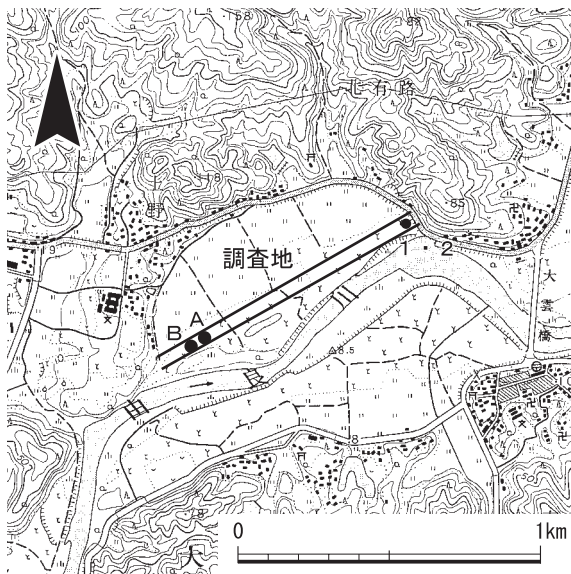
はじめに 阿良須遺跡は、京都府北部を縦貫し若狭湾に注ぐ由良川左岸の自然堤防及び後背湿地に立地する遺跡である。今回の発掘調査は、由良川緊急治水対策事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。阿良須遺跡の発掘調査は、昨年度の小規模調査(第1次調査)で、調査対象地の南西部から古墳時代～飛鳥時代、鎌倉時代の遺物包含層と柱穴・土坑状遺構を検出した。今回は、調査対象地の南西部で面的調査(A・B地区)、北東部で小規模調査(第1・2トレンチ)を行った。

**調査の概要** 小規模調査では、地表下4.5m(標高3.5m)まで掘削したが、砂・シルト・泥土が堆積し、遺構・遺物は確認できなかった。

A・B地区は南西から北東方向に緩やかに下がる地形である。基本的な土層は砂であり、部分的に洪水に関連した砂利の堆積もみられた。

第1面は標高6.3～6.5m(地表下2.1m)付近の中世遺物包含層の下面である。精査を行ったが遺構は存在しない。第2面は標高5.8m付近である。柱穴・土坑・流路跡を検出したが、分布密度は薄い。出土遺物は僅かであるが、飛鳥時代の土器が出土した。第3面は標高4.4m付近である。A地区南部～B地区にかけて由良川旧河道の右岸部を検出した。右岸斜面部では砂層中からほぼ完形品の土師器甕2点・須恵器の平瓶・横瓶がまとまって出土した。

**まとめ** 第2面で飛鳥時代の集落関連遺構を検出した。遺構が浅く疎らな分布状況や遺物包含



調査地位置図(国土地理院1/25,000 河守)

層がないことから、当時の遺構面は洪水で削られた可能性が高い。第3面では飛鳥時代に埋没した旧河道跡を検出した。川幅は35mを超え調査地外に延びる状況にある。第2面と第3面間は飛鳥時代遺物を含み、砂と薄い粘土が互層状態で堆積する。また、この間に厚さ約1mの砂利層も存在した。阿良須遺跡では、飛鳥時代を中心に大小の洪水が頻発した状況が土層観察で確認できた。

(竹原一彦)

## とうこうじ 4. 東光寺跡

所在地 舞鶴市字京田小字東光寺

調査期間 平成28年5月26日～11月2日

調査面積 1,600㎡

はじめに 東光寺跡は舞鶴湾に注ぐ伊佐津川の右岸にある遺跡で、地名や地元の伝承から、東光寺跡として遺跡地図に掲載されている。今回、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受け、平成28年度西舞鶴道路事業に伴う発掘調査を実施した。調査前の地形では標高40mあたりから標高17mにかけて平坦面が4か所あり、今回の調査対象地はそのうちの3か所で、標高25m以下にある平坦地を中心に発掘調査を実施した。

検出遺構 標高25m前後にある平坦地では、15世紀段階に平坦地を成形していることが明らかとなり、その平坦地成形に際して6世紀後半段階の古墳を壊していることが明らかとなった。標高20m前後を測る平坦地では、建物跡を想定する柱穴と礎石は検出されなかったが、建物を作るための地業が行われたと考えられ、整地層とその下層で暗渠と思われる溝(S D05)、整地層の上面では残存長2m前後の石列(S X04)を検出した。またこの平坦地の北端では、平坦地上面から法面にかけて多くの石材とともに16世紀後半段階の遺物(すり鉢など)と五輪塔の一部(地輪・水輪)が出土した。標高17.7m前後の平坦面では、平坦面上部と裾部に15基程度の柱穴を検出したが、建物列を復元するにはいたっていない。

出土遺物 東光寺跡は畑の開墾・樹木の植林により地形が大きく削られており、検出遺構は少なく、その各遺構からの出土遺物もわずかであったが、古墳を壊した後の包含層からは15世紀の青磁・白磁・瓦質土器が、平坦面で検出したS X04・S X05の上面からは16世紀後半の陶器製すり鉢などが出土した。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 西舞鶴・梅迫)

まとめ 東光寺跡は小字名に「東光寺」と残っていることから、寺跡を想定して発掘調査を実施したが、寺跡と断定できる資料は得られなかった。しかし、整地層などの地業が行われており、調査前に確認した4か所のうち、3か所の平坦面は、中世段階に造成され、現在にその地形が反映されていることを確認した。

(石井清司)



てらまちきゅういき ほうじょうじ  
5. 寺町旧域・法成寺跡

所在地 京都市上京区寺町荒神口下ル松陰町131他

調査期間 平成28年6月6日～8月8日

調査面積 710㎡

はじめに 今回の調査は、府立鴨沂高等学校改築等工事に伴い、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。調査地は、藤原道長が寛仁4(1020)年に創建した法成寺跡の境内付近とされる。天正18(1590)年には、豊臣秀吉が市中に散在していた寺院を寺町近辺に集約した寺町旧域の一画にもあたる。「洛中絵図」から、革堂行願寺・専念寺・常念寺が想定される

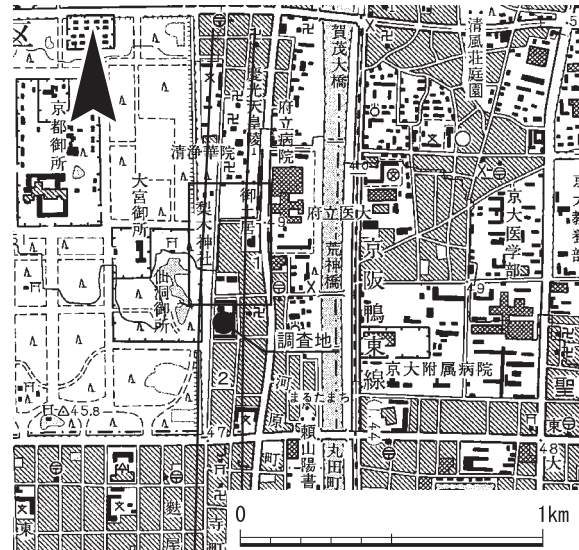
調査概要 調査地名は、平成26・27年度調査に引き続き設定した。本年度の調査地は、8～11トレンチの4か所である。

8トレンチ わずかに残る遺構面から、東西方向の溝2条、柱穴2か所、石列、土坑を検出した。そのうち、溝1条は、幅1.8m、深さ0.3m、検出長0.8mを測り、行願寺と専念寺の境界に伴う溝の可能性はある。土坑は、一辺3.5×0.8m、深さ0.4mを測り、拳大～人頭大の石を敷き詰めていた。何らかの施設に伴うと考えられる。

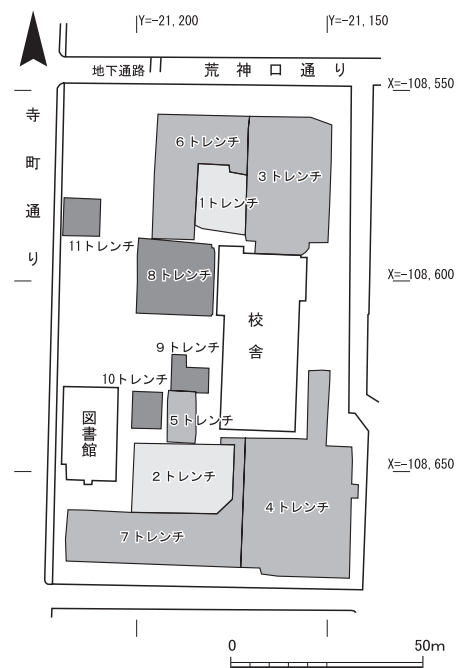
9・10トレンチ 後世の攪乱のため遺構は確認できなかった。

11トレンチ 大半が攪乱であった。この攪乱下から、宝永の大火後、片付けの際に掘られた土坑を1基検出した。瓦・陶磁器片が出土した。

まとめ 今回の調査で多くの遺構は検出できなかったが、平成26年度から3年度にかけて調査した成果とあわせて、今後検討して報告する予定である。



第1図 調査地位置図  
(国土地理院 1/25,000 京都東北部)  
1. 法成寺跡 2. 寺町旧域



(岡崎研一) 平成26年度調査地 平成27年度調査地 平成28年度調査地

第2図 調査地配置図



## 6. へいあんきょう 平安京跡(平安京左京一条三坊二町)

所在地 京都市上京区下長者町通新町西入藪ノ内町42番地

調査期間 平成28年4月1日～平成29年1月6日

調査面積 3,360㎡

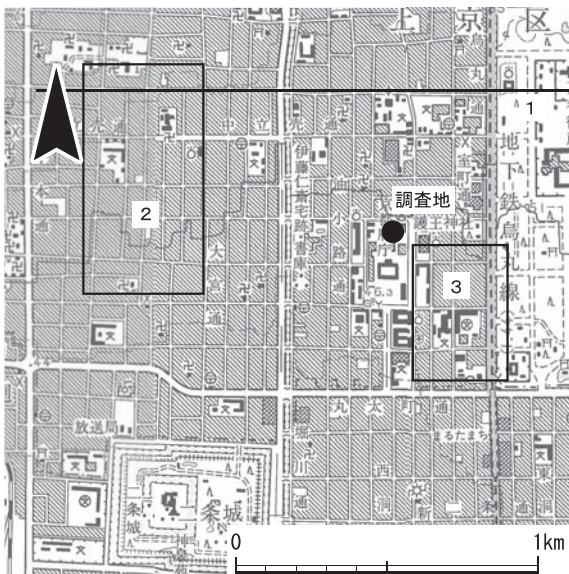
はじめに 今回の発掘調査は京都府警察本部新庁舎建設工事に伴い、京都府警察本部の依頼を受け、平成27年度から継続して実施している。平成27年度の調査では、平安時代から近世初頭にかけての遺構・遺物のほか、江戸時代末の京都守護職上屋敷の建物跡を検出した。

調査概要 調査対象地の南側を昨年度調査し、今年度は北側の調査を行った。

北側の調査では南側の調査と同様に幅広い時代にわたる多数の遺構・遺物を確認した。特に今年度の調査では、戦国時代の大規模な堀を確認している。



写真1 堀全景(東から)



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西北部・東北部)

1. 平安京跡 2. 聚楽第跡 3. 旧二条城跡

戦国時代の堀 調査区の北端近くで見つかった東西方向の堀で、検出長約75m、幅約5m、深さ3～3.5mを測る。付属する土塁や柵は確認できなかったが、堀の埋土は地山に近い砂礫が北側肩部から南側へ斜めに堆積しており、一度に埋没したと考えられることから、堀を掘削した際に生じた土砂をもって、堀北側に土塁を構築していた可能性がある。出土した遺物からこの堀は、16世紀第3四半期には機能していたとみられ、豊臣秀吉の京都大改造に伴い埋め戻されたと考えられる。

まとめ 今回の調査で確認した堀は、応仁・文明の乱以降に築かれた構の一部と考えられる。これまでに確認されている構の中でも、大規模なもので、上京を囲った「惣構」の可能性はある。「惣構」の全容については不明な点が多いが、戦国時代の混乱期の京都の姿を知るうえで貴重な資料となった。上京の構の南限になる可能性もあり、今後の周辺の調査に期待される。

(田原葉月)

## ふしみじょう 7. 伏見城跡

所在地 京都市伏見区村上町395他

調査期間 平成28年9月27日～12月15日

調査面積 400㎡

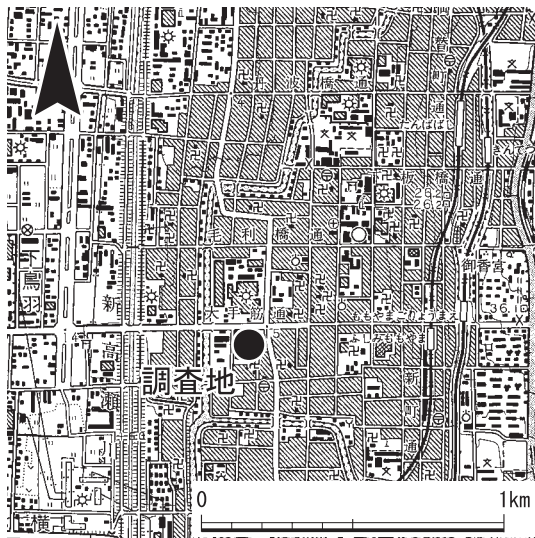
はじめに 今回の調査は、京都府保健環境研究所及び京都市衛生環境研究所新築(合築)工事に伴い、京都府健康福祉部の依頼を受けて実施した。調査地周辺は豊臣秀吉によって造られた伏見城の惣堀内側にあたり、武家屋敷があった地域である。調査地は江戸時代の絵図では、湿地として描かれている。それを証明するように1976年度の京都府教育委員会の調査では、湿地の北辺が検出され、湿地堆積層からは江戸時代後期以後の木製品が多く出土している。

今回は、湿地の範囲とその周辺に有る武家屋敷の遺構を検出する目的で調査を実施した。

調査概要 発掘調査は排土置場の都合から、始めに対象地の南部に東西に長い1トレンチを掘削し、埋戻しの後、東部に南北に長い2トレンチを設定して調査を進めた。

1トレンチの地表の標高は14mで、地表下1.6mまで砂やコークスなどからなる整地層が認められた。その下からは洪水に伴う砂層が続き、次に湿地状の粘質層にかわり、標高11mまで堆積を確認した。砂層は西から東に下がる傾斜を持ち、上位からは南北方向に並んだ2条の杭列を検出した。湿地堆積層や砂層からは17世紀後半以降の遺物が出土した。これらのことから、江戸時代に湿地が管理されていたことがわかった。

2トレンチでは地表下1.8mまで整地層が続き、水平堆積の砂層が続き湿地状の粘質層に変化し、標高11.7mまで粘質層を確認した。調査区内では湿地の岸部が検出できなかったことから、トレンチ全体が湿地の中に含まれていることがわかった。湿地堆積層からは漆器椀、桶部材、下



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都東南部)

駄、木簡等の木製品が出土している。木簡には人名が複数書かれたものがあり、漆器椀には家紋の一種である「沢瀉紋」が描かれていた。伏見城を描いた絵図によると同じ家紋を用いた水野氏が調査地近隣に住んでいたとされる。

まとめ 今回の調査の結果、江戸時代の絵図と同じように湿地があることが確認できた。出土遺物では17世紀後半以後の陶磁器類が出土しているが、絵図が描こうとした桃山期まで遡る遺物は確認できなかった。今回の調査結果は、江戸時代に復元的に描かれた絵図を再検討する資料になると考えられる。(竹村亮仁)



## 8. <sup>ながおきゅう</sup>長岡宮跡第514次・<sup>でんちょう</sup>殿長遺跡

所在地 向日市寺戸町北垣内

調査期間 平成28年6月28日～7月14日、12月19日～21日

調査面積 30㎡

はじめに 今回の調査は、西京高槻線防災・安全交付金(交安)業務に伴って、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京跡北辺(新条坊)にあたる。また、旧石器時代から平安時代にかけての集落遺跡である殿長遺跡の範囲内に位置している。

調査開始当初、調査対象地内に建物が撤去されていない部分があった。そのため、調査可能部分の調査が終了した段階で一旦中断し、建物の撤去を待って再開した。

調査概要 調査地は、ほぼ南北に延びる府道西京高槻線(物集女街道)の両側の狭小な地点であり、その東西両側に5か所のトレンチを設定して調査を実施した。

長岡京の北辺に想定されている部分に設定したトレンチでは、明治時代の型紙印判染付皿などの近代遺物を含む旧耕作土と考えられるシルト層や河川堆積とみられるシルトと砂礫の互層を確



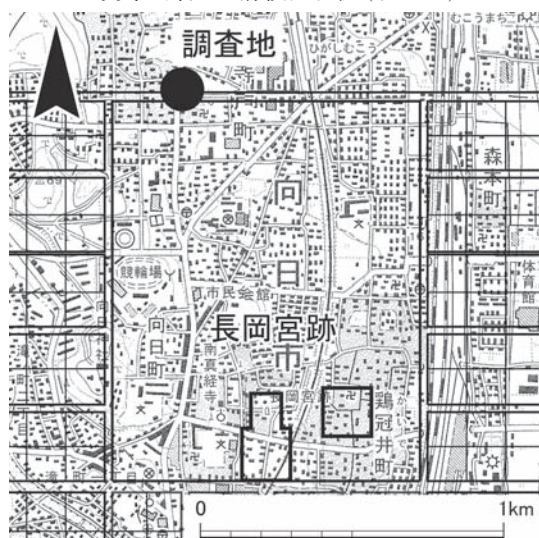
写真 井戸・溝検出状況(北から)

認した。遺物は出土せず、顕著な遺構もなかった。

府道の西側に設定した3か所のトレンチでは、南北方向に延びる溝状遺構を検出した。13世紀頃の瓦器椀などが出土した。それぞれの遺構が一体のものか否かは、断片的な調査のため確定できない。このほか、12世紀頃の瓦器椀が出土した不定形土坑状の遺構や16世紀頃の信楽焼播鉢片が出土した円形の石組井戸などを検出した。

まとめ 今回の調査では、長岡京北辺や長岡宮関係の遺構は検出しなかった。調査成果としては、中世の遺構を確認し、少量ではあるが、中世の良好な遺物が出土した。

3か所のトレンチで検出した溝状遺構は、ほぼ現在の府道に沿って検出している。このことから、仮に一体のものとする、13世紀頃の物集女街道の西側溝とも考えられる。この溝状遺構は16世紀頃の井戸に切込まれており、中世後期にはその部分が宅地となったことを示すものとも言える。今回の調査で、中世の景観の一端を示す遺構を検出した可能性がある。(引原茂治)



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

## ながおかきょう いのうち 9. 長岡京跡第1138次・井ノ内遺跡

所在地 長岡京市今里5丁目21～25

調査期間 平成28年8月23日～10月14日

調査面積 196㎡

はじめに 今回の発掘調査は、平成28年度長法寺向日線防災・安全交付金業務委託に伴い、京都府建設交通部の依頼を受け実施したものである。

調査地は、西山丘陵から東に延びる標高38.4mの丘陵上に立地する。縄文時代～中世までの複合遺跡である井ノ内遺跡の南端、今里遺跡の北端でもあり、両遺跡が重なる地点である。長岡京の条坊復原によると右京三条三坊十・十五町にあたる。府道に沿った南側の幅約6m、東西130mが対象となった。

調査概要 対象地内に西から順に1～6トレンチを設定した。耕作土直下が地山面となっており、耕作に伴い遺構が削平を受けている。1トレンチでは掘立柱建物、土坑2基、井戸1基を確認した。掘立柱建物は北東辺の一部を検出したもので、主軸はN-11°-Eである。井戸は北側に農業用水路があり全体の調査を行えなかったが、一辺2m以上の、方形縦板横棧留の井戸枠を持つ。出土遺物より長岡京期と考えられる。2トレンチでは建物の存在が想定される小柱穴群、1トレンチとの関連が想定される大型の柱穴2基のほか、土坑を検出した。小柱穴の時期は不明であるが、南側で検出した土坑が中世と考えられることから、同時期の可能性がある。4トレンチでは掘立柱建物の北西辺の一部を検出したもので、主軸はN-25°-Wである。6トレンチでは柱穴2か所を検出したが建物は復原できない。3トレンチ・5トレンチからは遺構・遺物とも検出されなかった。



調査地位置図  
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

まとめ 西側隣接地の右京第952次調査で検出されていた、古墳時代の掘立柱建物は主軸が西に15°～28°振れており、今回4トレンチで検出した建物も西に25°振れることや古墳時代後期の遺物が出土していることから同時期と考えられる。1トレンチで検出した建物は柱間寸法が短く、952次調査の建物と近似することから同時期の可能性がある。今回の調査では、古墳時代の集落域がさらに東側まで広がることが明らかとなった。長岡京期の条坊に関する遺構を検出しなかったが、井戸SE31を検出したことにより周辺に同時期の建物等が存在した可能性が想定される。(増田孝彦)



## 10. <sup>しばやま</sup>芝山遺跡第15・16次(A地区)

所在地 城陽市富野中ノ芝

調査期間 第15次：平成28年1月26日～3月3日

第16次：平成28年4月25日～8月10日

調査面積 1,420㎡

はじめに 今回報告するA地区の調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社からの依頼を受けて平成27・28年度にわたり実施した。新名神高速道路の建設予定地の芝山遺跡の範囲では、着手した順にアルファベットで地区名を付した。

芝山遺跡のこれまでの調査では、今回の調査地の北西約300m地点で、真北に方向を揃えた飛鳥から奈良時代の建物群を検出している。また調査地の西側では奈良から平安時代の道路側溝とされる、併行する2条の溝を検出している。

**調査概要** 調査は、丘陵の南西側の緩斜面とそれに続く平坦面に調査区を設定して実施した。調査によって飛鳥時代の土坑、奈良時代の掘立柱建物、柵列、溝、土坑などを検出した。

飛鳥時代の土坑は南側緩斜面で検出し、長さ約2.1m、幅約1m、深さ約0.15mを測る。内部の南西隅で須恵器杯蓋2点を検出した。昭和61年度に実施された第3次調査では、古墳の埋葬施設として土器を納めた土坑を検出しており、この土坑も2点の須恵器を供えた墓壇と考えられる。

平坦面では奈良時代の掘立柱建物7棟を検出した。これらの建物は、主軸が北から西に約26°振れる建物群Ⅰと約35°振れる建物群Ⅱの2群に分けられる。建物群Ⅰは掘立柱建物4棟、建物群Ⅱは掘立柱建物3棟を検出した。柱穴の切り合い関係から建物群Ⅱは建物群Ⅰより新しい。東側の緩斜面裾部では2条の柵列を検出した。建物群Ⅰに平行する位置関係から同時期と考えられる。また東辺の緩斜面斜で検出した土坑SK57は、隅丸方形で一辺1.7m、深さ約0.5mを測り、



土師器・須恵器片とともに平城京出土の軒平瓦1片が出土した。また、東辺の斜面地で、建物群に平行した溝を4条検出した。丘陵上方からの雨水から建物群を避けて排水する溝と思われる。

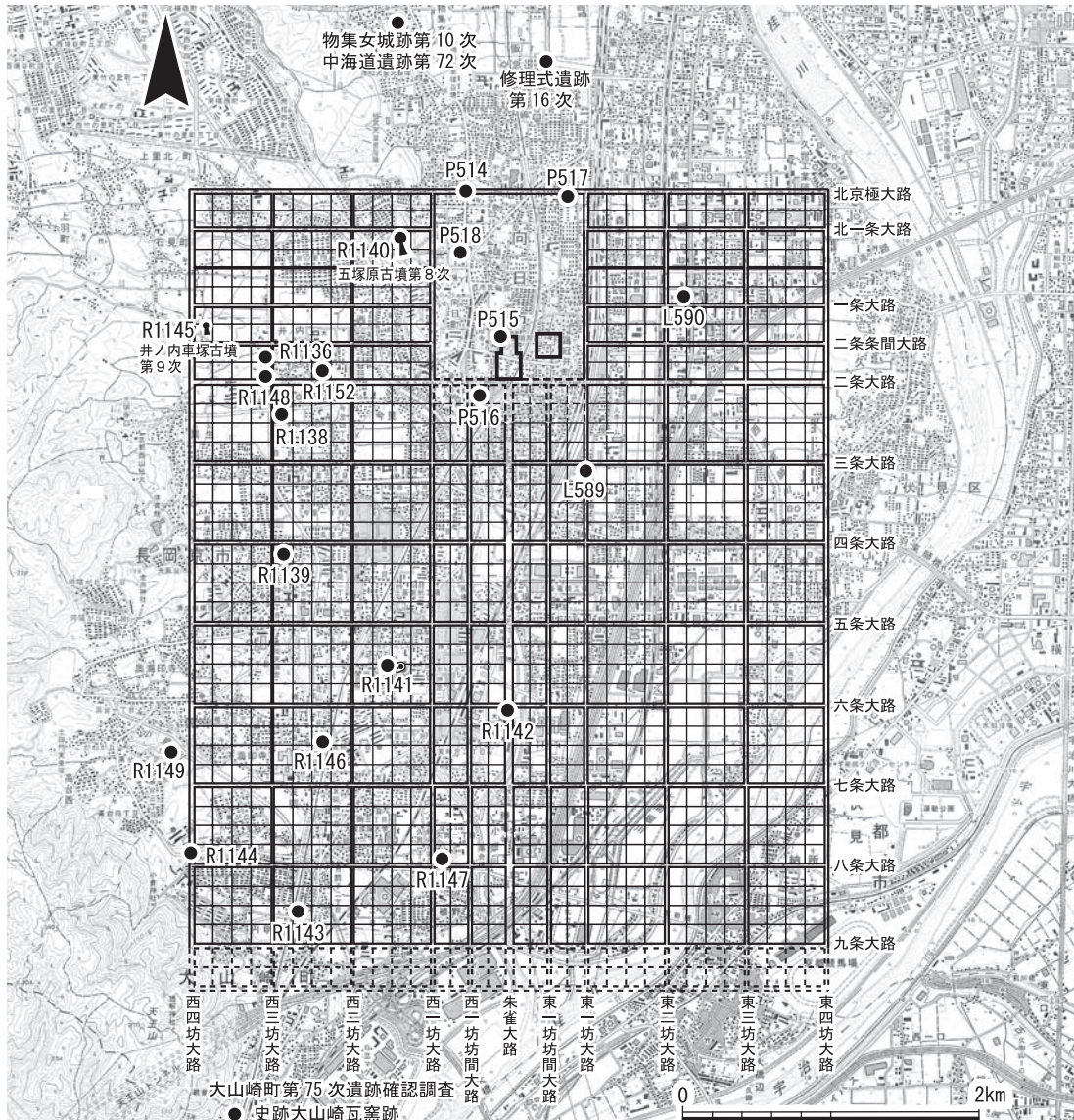
**まとめ** 芝山遺跡では過去の調査により、奈良時代の正方位の建物群、道路側溝と判断される直線的な溝、道路に平行する多数の掘立柱建物群を検出している。広範囲に方位を揃えて並ぶことから官衙的な性格が考えられている。今回の調査では、道路に併行する建物群は少なくとも2時期にわたることが明らかとなった。(橋本 稔)

## 長岡京跡調査だより・127

長岡京跡における発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成28年9月から平成29年1月の例会では、宮域5件、左京域2件、右京域14件、京域外3件の合計24件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

**宮域** 大極殿院回廊の北西角で実施された第515次調査(向日市鶏冠井町)では、西面回廊基壇の凝灰岩抜き取り痕跡を確認し、基壇幅が8.3mであることが判明した。第518次調査(向日市寺戸町)では、銅製仏具などの江戸時代の遺物が出土する東西方向の堀状遺構が検出された。

**左京域** 第589次調査(向日市上植野町)では、幅約1.2mを測る東一坊大路の西側溝と一辺約0.7



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。



m規模の柱掘形が4基検出された。第590次調査(向日市森本町)では、中世の南北溝2条と長岡京期の整地痕跡、弥生時代中期の土坑が確認され、整地土層中から二彩浄瓶が出土した。

**右京域** 第1140次調査では、五塚原古墳の後円部の調査が行われた。後円部は全て盛土により3段に築盛され、各段斜面に葺石、テラスに敷石を敷設する状況が追認されるとともに、1段目墳丘裾部で埴輪棺1基が検出された。底部を打ち欠いた朝顔形埴輪を棺本体とし、小口は別の埴輪で塞いでいる。墳丘テラスの礫敷を除去して地山を穿ち、外した礫で棺周囲を囲画して墓壙を構築している。使用された埴輪は妙見山古墳の埴輪に近似し、布留0期築造と考えられる五塚原古墳とは4～5世代の時間の乖離が認められる。第1138次調査(長岡京市今里)では、長岡京期の縦板隅柱横棧留め井戸と大小の柱穴、土坑が検出された。柱穴は狭い調査区内で建物復元は困難だが、古墳時代後期と長岡京期が混在するものと考えられる。第1139次調査(長岡京市天神)では、長岡京期の土馬が埋土に混入する中世の東西溝、下層に弥生土器、上層に長岡京期の土器が出土する不整形土坑、有舌尖頭器が出土した流路跡などが検出された。朱雀大路に位置する第1142次調査(長岡京市東神足)では、路面は削平されていたが、江戸時代の勝竜寺城に関連するとみられる溝や多数の小穴と、弥生時代の溝や多数の小穴が検出された。出土遺物には平安時代の黒色土器・緑釉陶器、弥生時代の碧玉未製品・石包丁・石鏃などが含まれる。第1143次調査(大山崎町大字若宮前)では、中世の溝と根石をもつ柱穴・土坑・井戸が検出された。延喜式内社小倉神社の末社石倉神社の整備に伴う第1144次調査(大山崎町大字円明寺)では、祠を据える基壇部分の調査が行われ、平坦な地山の直上に拳から人頭大の礫を石塚風に積み上げて構築している状況が確認された。井ノ内車塚古墳第9次調査に当る第1145次調査(長岡京市井ノ内)では、横穴式石室が初めて確認された。原位置をとどめる石材のほか、石室下部の地業や石室構築と墳丘築造土の関係が明らかになった。第1148次調査(長岡京市井ノ内)では、中世の土師皿埋納土坑と古墳時代～中世の小規模なピットが検出された。埋納土坑には13世紀の土師皿が18枚以上整然と重なった状態で出土し、祭祀後の投棄土坑と考えられた。第1151次調査(大山崎町大字茶屋前)では、古墳～平安時代の遺物包含層が確認されたが、それより下部は洪水堆積層が広がり、谷川の吐出し流末の様相を呈していた。第1152次調査(長岡京市井ノ内)では、根石を有する柱穴が3尺等間で東西方向に並ぶ状況が確認され、元禄期の絵図にみえる「地藏院」に関連する遺構と解釈された。

**京域外** 修理式遺跡第16次調査(向日市寺戸町)では、調査区で確認されていた幅員約24m規模の東西道路の北側溝延長部、及び弥生～古墳時代前期の落ち込みが検出された。物集女城跡第10次・中海道遺跡第72次調査(向日市物集女町)では、一辺約70mを測る方形主郭内部の調査が行われ、東土塁に平行する区画土塀の基礎、廃棄土坑、礎石を残す柱穴などが検出され、15・16世紀の遺物が出土した。史跡大山崎瓦窯跡の整備事業にともない大山崎町第75次遺跡確認調査が実施された。これまでの調査で「L」字形に配列された平窯による瓦窯群が確認されていたが、南に開口する窯群の西への展開を探る目的で調査された結果、さらに2基の瓦窯(11・12号窯)が奥壁ラインを揃えて6m等間隔で配置されている状況が確認された。

(伊賀高弘)

## 現地公開状況(平成28年9月～平成29年1月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査をしている京都府内の遺跡の現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

### 現地見学会

9月1日(木)に世界考古学会議第8回京都大会(WAC8)に伴い、京都府庁北側の平安京跡の発掘現場見学会を実施し、当日32名、翌日3名、計35名が参加した。様々な国の方が来られ、日本の発掘調査の様子に興味深く見学した。

11月4日(金)京丹後市丹波丸山古墳で京丹後市立丹波小学校の児童を対象に現地見学会を実施した。当日は、児童と教員合わせて10名が参加し、初めて見る発掘調査に興味深く見入っていた。

12月23日(水・祝) 亀岡市立稗田野小学校の児童を対象に、佐伯遺跡の現地見学会を実施した。当日は、児童と保護者合わせて120名の参加があった。当日はあいにく雨が降り、現地調査は見学できなかったが、出土した遺物を興味深く見学した。

### 現地説明会

10月8日(土)舞鶴市東光寺跡で現地説明会を実施し、83名が参加した。当地は参勤交代に通った街道が近くに通っており、説明会終了後に付近の一里塚まで歩かれた方もいた。

11月19日(土)に平安京跡の現地説明会を実施し、590名が参加された。平安京跡では、堀や土塀などで敵の侵入を防ぐ「構」が見つかりました。参加者は、堀の大きさに驚き、京都の戦乱の歴史を感じているようだった。

1月21日(土) 亀岡市佐伯遺跡で現地説明会を実施し、95名が参加した。奈良時代の掘立柱建物や古墳が見つかった。参加者は、熱心に職員の説明に耳を傾け、遺構や遺物を観察した。

1月28日(土) 木津川市岡田国遺跡の現地説明会を実施し、290名が参加した。恭仁京に関連する可能性もある奈良時代の道路や、同じ方位の建物群が見つかりました。参加者は、検出した道路を古代に思いをはせて歩いた。

(菅 博絵)



木津川市岡田国遺跡現地説明会風景

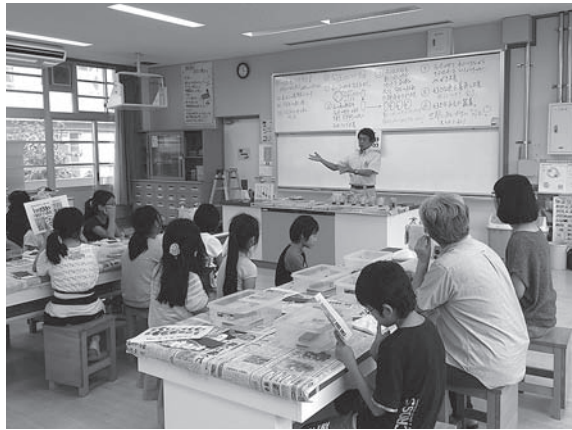


## 普及啓発事業(平成28年9月～平成29年1月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

### 京のまなび教室

9月21日(水)・10月5日(水)に長岡京市立長法寺小学校の「らくしんすくすく教室」にて、両日あわせて4年生から6年生児童35名、ボランティア10名を対象に京のまなび教室「勾玉をつくろう!」を実施した。最初に勾玉の起源と昔の装飾品について学んだ後、実際に勾玉づくりを体験した。滑石に思い思いの勾玉の絵を描き、砥石を使って削っていった。出土した勾玉の写真を見ながら作る児童や、独創的な勾玉を作る児童もいた。児童は、できあがった勾玉を好きな色に着色し、最後に紐を通して、大切に持って帰った。



勾玉の起源について学ぶ児童

### 関西考古学の日2016

「関西考古学の日」は、今年で9年目を迎える全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックに所属する11法人が、広く市民の皆さんに文化財や考古学の重要性などを知っていただくために、7月から11月の5か月間に考古学に関連した行事を実施する連携事業である。

当調査研究センター研修室にて「秋の考古学講座」を2回実施した。10月1日(土)に小池寛参事が「韓国・武寧王陵から見た中国南朝・梁と日本の墓制」と題して講演し、26名の参加があった。また、11月5日(土)には、菅博絵調査員が「うろこ文の起源を中央・東アジアの考古資料から探る」と題して講演し、24名の参加があった。各講座の参加者は興味深く聴講され、熱心な質疑があった(本誌34頁参照)。



秋の考古学講座講演風景

### 藤森中学校「生き方探究・チャレンジ体験」

11月1日(火)・2日(水)・4日(金)に京都市立藤森中学校2年生3名が、京都市の推進事業「生き方探究・チャレンジ体験」にて発掘調査現場と当調査研究センターにおいて埋蔵文化財の出土遺物整理作業の体験を行った。

11月1日・2日は、城陽市内の発掘調査現場にて、遺跡や発掘調査の説明を受け、遺構の掘削や検出作業、遺構の実測、光波測距機やレベルなどを使用した測量を体験した。

11月4日は、当調査研究センターにおいて、出土した遺物を洗浄・注記し、石器の実測や、瓦の拓本を体験した。また、写真撮影や展示の講義を行った。現地で発掘調査を実施した後、報告書を作成し、出土した遺物を活用していくことについて体験した。

発掘調査現場では「遺構の掘削作業が大変であったが、土器の破片を見つけうれしかった、仕事の大変さや厳しさを知り、今回の経験を活かし将来に繋げていきたい」との感想をいただいた。



レベルを使った測量体験

### 2016.向日市まつり

11月19日(土)・20日(日)に京都向日町競輪場<sup>あじろ</sup>にて開催された向日市まつりに「伝統の網代編みに挑戦しよう！」と題して出展した。

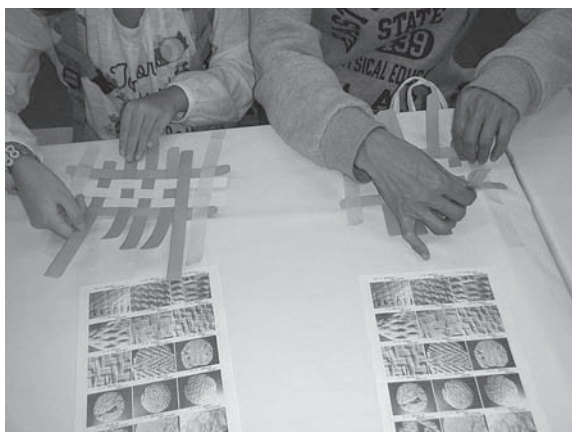
現在まで続いている編み物の歴史について説明し、梱包用の紐で網代編みのコースターづくりを体験講座を実施した。

小さなお子さんからご年配の方まで幅広い年齢の方に体験していただいた。約8,000年前の縄文時代早期には、現在使用されている編み方が始まっており、出土した縄文時代の籠の写真を見て、当時の技術に感心されていた。また、コースターづくりでは、紐の通し方に苦戦されたが、親子やお友達同士でお互いに教えあいながら楽しく取り組んでいただいた。完成したコースターは、持ち帰っていただいた。1日目はあいにくの雨だったが、2日目は天候に恵まれた。両日合わせて115名の方に体験していただいた。

(管 博絵)



向日市まつり出展風景



網代編み体験状況

## 韓国・武寧王陵から見た 中国・南朝梁と日本の墓制

小池 寛

### 1. はじめに

武寧王陵は、大韓民国忠清南道公州市錦城洞の海拔130mの宋山とよばれる丘陵上に位置する。宋山には13基からなる宋山里古墳群が所在しており、1971年、5号墳及び6号墳の排水溝工事中に羨門部の閉塞の磚積みが検出された。

発掘調査により「寧東大將軍百濟斯麻王、年六十二歳、癸卯年(523年)五月丙戌朔七日壬辰崩到」と刻まれた墓誌が出土し、百濟第25代王の武寧王陵であることが判明した。また、王妃を合葬した塼室墳であること、そして、木棺材が日本固有の高野槨であり、金箔で施文した頭枕や足座、冠飾などの金工品、中国南朝の舶載鏡のほか陶磁器類など約3000点の遺物が副葬されていたことが明らかになった。

講座では、武寧王陵を中心にその塼室墳の構造から中国南朝の墓制および日本の終末期古墳に与えた影響を中心に論じた。

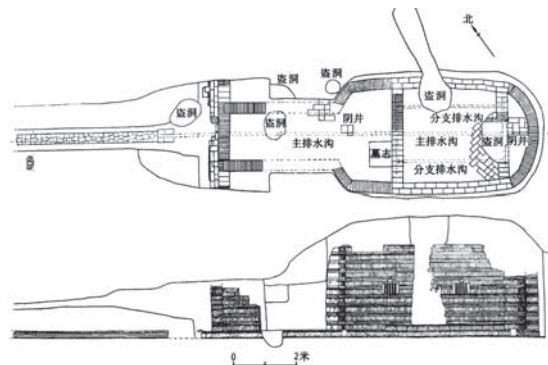
### 2. 武寧王陵と中国南朝の墓制

武寧王陵に見られる塼室墓は、朝鮮半島起源の墓室構造ではなく、中国漢代から連綿と継承された塼室墓にその起源がある。武寧王は、高句麗の南下政策に対抗するため、中国南朝と政治的な関係を強固にした。その結果、積極的に中国南朝の墓制を導入したと考えられる。

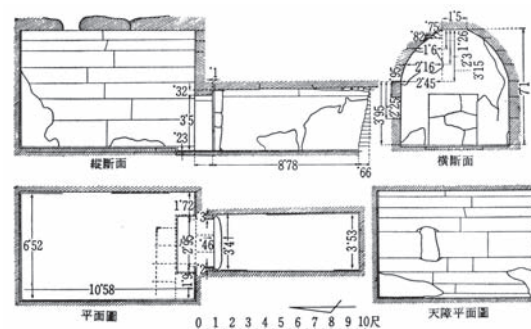
中国南朝には、南京市靈山南朝墓M2号墳などの塼室墳が知られている。同古墳と武寧王陵には、玄室の平面プランに相違がある。しかし、塼の文様や塼積の方法、そして、龕窓をもつ点などの共通要素が多く見られる。



第1図 武寧王陵玄室全景  
(『武寧王陵』学生社1974転載)

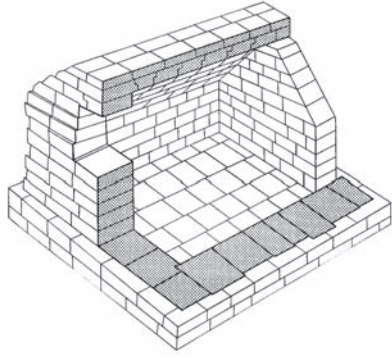


第2図 M2号墳実測図  
(南京市博物館「南京市靈山南朝墓発掘簡報」  
考古2012年第11期転載)



第3図 陵山里東1号墳実測図  
(姜仁求『百濟古墳研究』1977年転載)





第4図 東明神古墳石室概念図  
(飛鳥資料館『飛鳥の奥津城』2005年転載)

### 3. 百濟墓制と日本の墓制

百濟史では、漢城<sup>ハンソン</sup>に王都をおいた475年までを漢城時代(前期)、公州に王都をおいた475～538年までを熊津<sup>ウジン</sup>時代(中期)、そして、扶余<sup>フヨ</sup>に王都をおいた538～660年までを泗沘<sup>サビ</sup>時代(後期)に区分する。武寧王陵は、出土した墓誌に「癸卯年(523年)五月丙戌朔七日壬辰崩到」と刻まれていたことから、百濟中期の熊津時代に築造されたことは明らかである。百濟において天井部がアーチ形を呈する塼室墓は、王墓に採用された墓室構造であるため、

数多くは築造されなかった。しかし、アーチ形の石室は、扶余<sup>フヨ</sup>陵山里<sup>フヨムンサンリ</sup>2号墳(中下塚)に代表される後期泗沘時代の古墳にも僅かながら採用されている。一方、同じく後期に比定できる扶余陵山里東1号墳は、切石を積み上げ石室側壁を構築し、側壁最上段のみ持ち送った上に板石の天井石を高架している。5類型に及ぶ石室が、百濟後期には築造されており、その系譜も多様である。

日本の終末期に同様な石室構造をもつ古墳としては、奈良県高取町東明神古墳がある。持ち送りの状況や床面の構造などには相違点も見受けられるが、扶余陵山里東1号墳に見られる泗沘時代の石室が起源となっていることは、構造的にも明らかである。

このように日本の終末期の石室には、確実に百濟後期の墓制が影響していることがすでに指摘されている。

### 4. 凶讖思想による選地の可否について

墓制とは、石室構造のみならず、墳丘や副葬品、葬送に係る儀礼などを含めた制度を指し示す。武寧王陵が築造される過程において、中国南朝墓制の影響があったことは、すでに述べたが、当時の中国南朝で盛行していた凶讖<sup>ずしん</sup>思想に代表される選地思想もその一環として導入された可能性が高いことが武寧王陵の立地から推察できる。13基からなる宋山里古墳群は、丘陵鞍部に6基の古墳が築造されており、そのあり方は、他の後期古墳群と共通している。しかし、武寧王陵は、平坦な尾根の先端に築造されており、明らかに立地が異なっている。一方、日本の終末期古墳の多くは、それ以前の後期古墳群が、群集して築造されることに対して、尾根の先端や鞍部に単独で築造される事例が多くみられる。このことから、単独で築造された日本の終末期古墳については、凶讖思想に代表される選地思想が築造の背景にあった可能性が非常に高いと考えられる。

### 5. おわりに

この講座では、中国の南北朝間での対峙が、朝鮮半島の国ごとの鮮明な対立軸であったとを述べるとともに、古代日本においても、その観点で歴史事象を見直すべきではないかということの問題提起し、若干の意見交換を行い終了した。

(こいけ・ひろし=当調査研究センター調査課参事企画調整係長事務取扱)



# うろこ文様の起源を中央・東アジアの 考古資料から探る

菅 博絵

## はじめに

古墳時代後期になると日本列島内では、刀装具や飾履しよくりなどの金属製品にU字を上下に連続して配置する魚のうろこのような文様が盛行する。このうろこ文様は、日本だけでなく、朝鮮半島や中国、中央アジアにも類似する文様が確認できる。本講座では、うろこ文様は何を表現したか、また、その起源について考古資料から探った。

## 1. うろこ文様の種類 (図)

穴沢味光氏が、うろこ文様を5種類に分類しており、それに準じた(穴沢1979)。

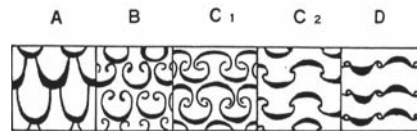


図 うろこ文様分類図(穴沢1979)

A型 … 「U」字型のうろこ文様を上列の半分の位置に交互に並べたもの

B型 … 「C」字形の双脚渦状文を上列の半分の位置に交互に並べたもの

C1型 … 上下で向きが異なる「C」字形の双脚渦状文を、列の半分の位置に交互に並べたもの

C2型 … C1型の双脚渦状文の両端部が接し、横のばしになったもの

D型 … 鎖状または波状文になったもの

## 2. 東アジアのうろこ文様

中国・西周代(紀元前1100～紀元前771年)の青銅器にA型のうろこ文様をもつ鳳が見られる。刀装具では、4世紀の集安禹山墓区992号墓鞘ジアンユイシヤンにA型の弧を上にするうろこ文様が見られる。また、B型のうろこ文様は、河南省洛陽中州路M115東周墓出土骨劍鞘ルオヤンチヨンチュルに使用されている渦巻き文様がある。

中国では、動物のうろこや羽を模したうろこ文様の他に、渦巻き文様の2種の文様が存在していたと考えられる。

一方、朝鮮半島においては、A型からD型まで全てのうろこ文様が見られる。古いものにはA型が使用され、新しいものにはB～D型が使用される。朝鮮半島においては、獣や鳥、植物の意匠に係わらず弧が上を向くものが多い。慶州天馬塚古墳出土腰佩ようはいでは、魚の頭部は弧が下を向くが、胴部は弧が上を向くように、複合的に使用されているものも存在する。

日本出土のうろこ文様は、刀装具や履くつなど金工品に多くみられ、A型とB型のうろこ文様のみが確認される。龍や鳳、魚などの模様ようばいに使用されるうろこ文様の向きは、弧が下を向くものが多い

く確認される。また、三葉環頭大刀や宮山古墳出土大刀など、植物の意匠を持つものには、孤が上を向いて使用される。

### 3. 中央アジア・東欧のうろこ文様

うろこ文様は、中央アジア・東欧においても様々なものに施文されている。古くはシュメールのイシン・ラルサ時代(紀元前2025～1763年)のリリト女神像に確認される。女神の隣に配するフクロウの羽毛はA型の孤が下を向いており、台座はA型の孤が上を向いている。また、5世紀のフン帝国時代とみられる墳墓からは、A型で孤が上を向いた刀装具が出土している。柄頭に鷲の頭を模していることから、羽毛を表現しているものと考えられる。

#### おわりに

うろこ文様は、鳥や獣などには、A型の孤を下にするうろこ文様を使用し、植物には、A型の孤を上にするうろこ文様を使用していた。施文する対象によって使い分けがなされていたと考えられる。しかし時代が経つにつれ、意味が希薄化し、使い分けがされなくなり、文様もA型のみから多様性を持つようになったと考えられる。

従来、うろこ文様は、A型からB型、C1型、C2型、D型へと変化したものとされている(穴沢1979)。しかし、うろこ文様は、A型からD型へ時間的変化によって文様が退化したわけではなく、動物のうろこや羽毛、植物の葉を表現したもの、そして中国で使用されていた渦巻き文様を起源とする文様であり、それぞれが相互に影響し合っ、変化していったと考えられる。

うろこ文様は、古くからその存在を確認できるが、いつから使用されていたか明確な資料は確認されていない。また、5世紀になるとユーラシア大陸で武器・武具などにうろこ文様を使用することが盛行する。これは、騎馬民族などによって大陸全土に伝播し広がった可能性や、同時期に偶発的に発生した可能性がある。今後さらなる検証を必要としている。

(すが・ひろえ = 当調査研究センター調査課企画調整係調査員)

#### 参考文献

穴沢味光・馬目純一「日本・朝鮮における鱗状紋装飾の大刀」(『物質文化』33 物質文化研究会)

1979

梅本康弘 2012「葛城・伝笛吹古墳群付近出土の装飾大刀～新羅式環頭大刀の展開～」(『龍谷大学考古学論集』Ⅱ－網干善教先生追悼論文集－) 龍谷大学考古学論集刊行会

金宇大 2011「装飾付関東大刀の技術系譜と伝播－朝鮮半島南部出土資料を中心に－」『古文化談叢』第66集 九州古文化研究会

# センターの動向

## (平成28年9月～平成29年1月)

月	日	事	項	
9	1	世界考古学会議(平安京跡現地公開：海外参加者35名)		
	14	女布遺跡(京丹後市)地元説明会(参加者21名)		
	21	京のまなび教室、らくしんすくすく教室「勾玉をつくろう！」(於：長岡京市立長法寺小学校17名)		
	22	女布遺跡(京丹後市)現地調査終了(平成28年8月2日～)		
	27	伏見城跡(京都市)現地調査開始(～平成28年12月15日)		
	28	長岡京跡連絡協議会		
	29	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：山形県～30日)		
	29	女布遺跡(京丹後市)調査終了		
	10	1	関西考古学の日2016、秋の考古学講座(参加者26名)	
5		京のまなび教室、らくしんすくすく教室「勾玉をつくろう！」(於：長岡京市立長法寺小学校18名)		
8		東光寺跡(舞鶴市)現地説明会(参加者83名)		
11		井ノ内遺跡(長岡京市)関係者説明会(参加者12名)		
14		井ノ内遺跡(長岡京市)現地調査終了(平成28年8月23日～)		
19		芝山遺跡2(城陽市)現地調査開始(～平成29年3月3日)		
26		長岡京連絡協議会		
28		阿良須遺跡(福知山市)関係者説明会(参加者24名)		
11	1	京都市生き方探究・チャレンジ体験、京都市立藤森中学校3名 (於：城陽市芝山遺跡および当センター～4日)		
	2	東光寺跡(舞鶴市)現地調査終了(平成28年5月26日～)		
	4	丹波丸山古墳(京丹後市)京丹後市立丹波小学校現地見学会(参加者10名)		
	5	関西考古学の日2016、秋の考古学講座(参加者24名)		
	16	長岡京連絡協議会		
	18	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：和歌山市)		
	18	平安京跡府庁職員公開(参加者200名)		
	19	向日市まつり「伝統の網代編みに挑戦しよう！」(参加者51名)		
	19	平安京跡現地説明会(参加者590名)		
	20	向日市まつり「伝統の網代編みに挑戦しよう！」(参加者64名)		
	21	長岡京跡第514次(向日市)現地調査終了(平成28年6月28日～)		
12	24	佐伯遺跡(亀岡市)関係者説明会(参加者53名)		
	25	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修会(於：兵庫県)		
	26	阿良須遺跡(福知山市)現地調査終了(平成28年5月25日～)		
	1	美濃山遺跡(八幡市)現地調査開始(～平成29年3月2日)		
	1	全国埋蔵文化財法人連絡協議会第2回役員会(於：東京都～2日)		
	14	丹波丸山古墳群(京丹後市)現地調査終了(平成28年6月3日～)		
	21	第21回理事会(於：メルパルク京都)		
	23	佐伯遺跡(亀岡市)現地見学会(禊田野小学校、禊田野町自治会主催、120名参加)		
	1	6	平安京跡(京都市)現地調査終了(平成28年4月1日～)	
		21	佐伯遺跡(亀岡市)現地説明会(参加者：95名)	
25		長岡京連絡協議会		
28		岡田国遺跡現地説明会(参加者：290名)		
28		北大塚古墳・大塚遺跡現地調査終了(平成28年7月21日～)		



## 編集後記

春の風が快い季節となりました。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第131号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、府内で実施した発掘調査・普及啓発事業の成果報告をいち早くお伝えするとともに、平成27年度に終了した当調査研究センター職員による共同研究事業の研究報告、さらに関西考古学の日関連事業「秋の考古学講座」の概要を掲載いたしました。

ご一読いただければ幸いです。

(編集担当 菅博絵)

## 京都府埋蔵文化財情報 第131号

平成29年3月30日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141